

第41回
全道造形教育研究大会
札幌大会

大会集録

研究主題

子どもをつくる喜びをひらく

- ・ 期日 1991.7.28(日)～29(月)
- ・ 会場 札幌市立三角山小学校
札幌彫刻美術館

第41回全道造形教育研究大会札幌大会

1991.7.28(日)～29(月)

大会集録



北海道造形教育連盟研究部

第41回全道造形教育研究大会札幌大会を終えて

— 造形の海に未来を求める —

第41回全道造形教育研究大会札幌大会
大会長 佐々木 理 温
(北海道造形教育連盟委員長)

7年振り9回目の札幌大会となった第41回全道造形教育研究大会は、平成3年7月28日(日)29日(月)の両日、緑濃い三角山や大倉山シャンツェを背景とした三角山小学校と札幌彫刻美術館を会場に開催されました。幸い心配された前夜の小雨も止んで好天に恵まれ、全道各地からおよそ500名の参加を得て盛会裡に終了できましたことに、心からお礼申し上げます。

本大会主題「子どものつくる喜びをひらく」は、新学習指導要領移行期の自覚をもとに、その趣旨や重点を生かした連盟研究主題「子どもの個性的表現を援ける造形教育」の実践課題として設定されました。造形教育では以前から子どもを主体とする授業や活動が主張され展開されてきましたが、この度は造形活動をするのは子どもであるという一層積極的な認識に立つ、より確かな指導観が求められています。

その具体のために、子どもにどんな力をつけてやるのが大切かを問う「子どもの見つけ直し」と、遊びを基盤にどんな子どもにでもできる到達点のある題材、多彩な表現が予想できる題材、選択の幅が広がる題材等から志向する「つくる喜びをひらく授業づくり」が、主題追求の視点とされました。

大会では、公開授業、分科会、クリエイティブプラザ(みて・ふれて・かんじる造形広場)等を視点の中心内容とし、主題についてご理解いただけるよう提示の方法を工夫しました。今後の鑑賞教育の在り方を提起した札幌彫刻美術館での鑑賞授業、分科会提言の他にもう一つの発表として刊行された実践事例集「造形の未来をひらく」、会場廊下に掲示の実践パネル「今、授業はかわる」等がその例に当たります。また、「みて・ふれて・かんじる」ことを主題としたクリエイティブプラザは、当日の時間帯ばかりでなく会場校の校庭やプールを含めた校地全体に、躍動感溢れた子どもの作品を展示し鑑賞していただきました。これは総合的な造形活動を考える一端ともなればの思いでもありました。

いずれにしても、札幌の図工・美術教師がここ数年積み上げてきた実践の大要を、札幌大会の内容として集約し立体的に構築できたことは大きな収穫となりました。分科会の助言者・司会者として明るい道筋をつけていただいた地方会員の方々や大会全般に鋭いご示唆や温かいご助言を寄せられた多数の皆様のご意見を糧に、再び造形の海に未来を求めて漕ぎ出したいと思えます。

最後になりましたが、北海道教育委員会、札幌市教育委員会、札幌市教育研究協議会図工・美術部をはじめ、何かと運営全般にご助言並びにご協力を賜った関係機関、協賛各社、会場校職員・PTAほか大会関係者皆様に深く感謝申し上げます。併せて次期第42回全道造形教育研究大会函館大会のご成功を祈念してご挨拶といたします。“函館の造形の海で、またお会いしましょう”

北海道造形教育連盟研究主題

『子どもの個性的表現を援ける造形教育』

札幌大会研究主題

「子どものつくる喜びをひらく」

札幌大会研究部長

北海道造形教育連盟研究部長 富田 泰

私たちは今、教育の大きな転換期を迎えています。まず、それを思い切って図らなければ課題を解決できないところにまで追い詰められているのではないのでしょうか。

日本の高度経済成長期を三十余年前とおさえるならば、当時の社会のものの見方、考え方は「知識、技術、経済」に偏っていたと言えると思います。これは、誰しものが認めるところであります。物質的に豊かになり、西欧先進諸国に追いつけ、追い越せのもと、教育もこの流れに沿う人材を要求し、重要視する方向で進められてきました。その点から見ると、先の教育も成功し、事を成し遂げたということになります。生活は豊かになり、居ながらにして世界の動きが見え、そして分かる時代になったのですから。しかし、大切なものをなおざりにしてきたのではないかという不安は、教育に携わるものばかりではなく、今の社会の通念になったといっても過言ではないと思われまます。社会の歪みや学校教育の諸問題を引き起こし、その原因を探れば探るほど大切なものを忘れていたと言わざるを得ません。

急速に発展しているハイテク産業は、人間関係を冷たいものにしてきたと言われます。機械が人間の間に入り込んでしまったこの状態を何とか解決し温かい人間関係を取り戻そうとしているのも事実です。この発達した物質的経済的生活に、人間的な温かい心の触れ合いや文化的接触（ハイタッチ）を導入しようとする運動があることも周知の通りであります。

言い換えると、軽視してきた人間性の回復といえると思います。今「人間」性というテーマでものが語られ、社会の様々な場所で、様々なマスメディアを使って主張されています。次のことが、この人間性回復ということに求められていると思います。

1. 人の心が分かること
2. 他人を思いやること
3. 自然を思いやること

これは、すなわち私たち造形教育連盟が常に教育目標としてきた『豊かな感性』にほかなりません。

国際化社会に生き、地球規模で語られる私たちの「生き方」を育む「教育」に大きな期待が寄せられていることは言うまでもありません。ましてや21世紀を背負う子どもたちの学校教育に課せられている比重は、最も大きいと言えます。とりわけ個人的な活動で占められる「造形教育」は、その重要性と共に「人間」としての基本的な行為に裏づけられる活動であることが再認識されているのではないのでしょうか。

I. 子どもの個性的表現を援ける

造形教育のみならず、学校教育が教科書重視の教科中心といった流れが過去100余年間あり、「知識、技術、経済」優先の考え方のもと、系統性という枠はめの中で教育が行われてきました。前述のように、そこに大きな忘れ物をしてきたと言わざるを得ません。そして、この急速な社会の流れは、ますます加速化するとされています。

このような社会の急速な変化に対して主体的に対応し、自らの生活を築いていくために、生涯にわたって学び続ける力を持たなければなりません。

したがって、学校教育が「自ら考え主体的に判断し、行動する能力を育成する教育」へとより強く思考し、「個性」重視の質的転換を図ることが求められているのです。

私たちは、思考力、創造力、直観力を育み、そして、「問題解決の力」ばかりではなく、主体的な「問題提起の力」の育成に努力しなければなりません。

一人一人の自由で独創的な物の見方、考え方、感じ方を重視し、子どもの多様さを受け入れ、それを援助し「個性」を生かす指導が求められるのです。

このことは、子ども一人一人の独自性（個性）を見とる力量が指導する側に望まれることでもあります。幼児、児童、生徒が一人一人自分の個性を生かしながら、生き生きと活動し、「生きる」ものとなることを助ける教育とならなければなりません。

今の教育システムの中で、多くの問題と対応しながら、その方法を考えていくことでもあります。また、一人一人の子どもには、それぞれ教育の適時性があることもおさえねばなりません。子どもが自ら伸びようとする時期に、それを助け伸ばす教育が必要です。教育する側が助けることが「教育」の本来の姿であることを認識する必要があります。

「教える教育」から「学ぶ教育」への転換です。

私たちにとって、ものをつくりだし、具体的なものに表す内容をもった造形教育は、『子どもの個性的表現を援ける』極めて難しく厳しい仕事とすることができます。

II. 造形教育の特質として

1. 新しいイメージをつくり出し
2. イメージを色や形に表し
3. 創る力、感ずる力を養い人間的なよさ、人間性を知ること

を上げる事ができます。

造形教育は、これらの特質を子どものが、頭、心、手の総合的な活動を通して喜びに出会い、人間としての「心が分かる自分」を自ら育てていくことを助けることです。省みるとそのためにいろいろな実践研究を試みてきたが、今一步というところで停滞していると言わざるを得ません。

子どもの表現するものの中に、私たちの幾つかの反省点があります。

1. 没個性的傾向と作品の画一化
2. 一人一人の子どもの独創性を軽視
3. 教えることと育てることが混在
4. 子どもの生活に結びつけていない

5. 手みじかな安易なセット教材の使用
6. 造形する態度への「要求と寛容」の不安
7. 押しつけ型指導に気づいていない

このような停迷の原因と模索は造形教育ばかりではありませんが、教育の在り方を再評価し、私たちの指導理念の質を整え、新たな情熱が望まれる時です。この在り方は各方面からいくつも提案されていますが、先の新学習指導要領も「急速に発達した科学技術」からの離脱を意図していることも明らかです。

*** 21世紀にむけての教育の全体方向として考えられることは、**

1. 人間形成に必要な基礎・基本的な生活習慣の徹底
2. 学習の喜びと生涯学習への思考と意欲の育成
3. 自己教育力の育成の多様化の推進
4. 国際化・情報化社会への適応力の育成
5. 学習の主体性と自己実現の育成
6. 教育内容の重点化、精選化
7. 体験重視の学習、地域素材の教材化
8. 総合学習の意義の自覚
9. 学年・学級制度の弾力化
10. 自然や地域社会への学習の場の拡大

です。造形教育の内容も方法も、これらの方向に呼応し、その質の高さが求められます。造形教育は、子どもの一人一人の「個性的表現」こそが教育の中心課題とならなければなりません。これは、図工の授業観と相俟って、教育の主流になることでありましょう。つまり

- ・ 学習者の個々に焦点をあて、学習者自身の学習が最大になる、“教える”ことよりも、“学ぶ”ことを強調
- ・ 学習者を一人の人格者として受容し、感覚と発想をより尊重、“自ら追及し、自らが回答すること
- ・ 個性とオリジナリティ（独創性）を支持、それを育てるための学校の機能は、個人の差異の尊重と認める態勢づくり
- ・ 学び方は、体験・経験を通じた発見と探索による学習法の強調と推進
- ・ 教師は学習のパートナーであり、ガイドに徹し、ティーチから一步退く

個性指導のもと、個人の進歩に対しての個別化と一人一人の進歩の確認であり、個性や独自性に応じる教育を基盤とする造形教育は、以上のような考えに立って進めなければならないでしょう。

以上のような教育の流れをみつめ、本連盟は子どもの個性的表現の援助のための実践をより深めていかなければならないと考えます。そのために次のことが求められます。

1. 子どもの生活の見つめ直しと生活のとらえの研究
2. 教材の再吟味(評価と有効性)とその実践
3. 個に応じた教材・教具の研究

4. 教えるもの、育てるものの分析とアプローチの多様化、新しい指導法の研究
5. 材料体験を豊かにし、連続性・連鎖性のある題材構成（単元構成）の研究
6. 新学習指導要領に対して、ひとつの意見をもつ理論研究の推進
7. 地域を生かした造形教育環境の改善研究

私たち本連盟は、日常教育実践ばかりではなく、造形的創造活動が一生を通して続いていくものという考えを基本にするとともに、造形家・芸術家の苦しみ・努力・喜びを味わえ、本来持っている「人間」としての心身の調和のとれた人格形成を目指したいものです。

これからの私たちの実践課題は、前述を十分にとらえた上で、柱としては、「教材づくり」であります。流れに対応する教材と指導を一つの理論のものに、早急につくり整えねばなりません。

Ⅲ. 実践の視点として

1. 『思いのままに表現する教材と指導』
2. 『制作の方法を拡げる教材と指導』
3. 『個性に基づいてこだわり探求する教材と指導』
4. 『領域や分野の枠を取り払った教材と指導』
5. 『造形活動の造形あそびの教材と指導』
6. 『感性が対話する生きた営みの鑑賞指導と教材化』

が考えられます。

私たちの日常実践は、子どもの実態、地域の特性に応じて常に変わり得るものです。子どもの「個性」を中核に進める造形活動は、その発達段階の適時に何を準備すれば膨らみ、大きく成長するのか、「何を育てる」のかを明確にしなければなりません。教材の精選を図り、子どもの『感性』と人間としての手仕事と生活を高めるための努力を更に進めていきたいものです。

Ⅳ. 札幌大会研究主題

『子どものつくる喜びをひらく』

* 研究主題と実践研究のおさえ

授業の中で、子どもの活動に驚かされることがあります。彼等の内に固まっているものが溶けたり、ゆさぶられたりすると、「子どもらしさ」がどっと現れたりして、私たちをびっくりさせることがあります。これは、潜在的にある子どもの力を、予期しないときによく感じられるものです。生き生きとして「子どもらしく」「自分らしく」素直に全身で喜びを表し、人間味を溢れんばかりに表出している時です。

「創る喜び」とはそんな時の子どもの姿に現れるものと思います。このような子どもの姿に出会った時、形や色を使って「創る」という造形行為はとても人間らしい（その子らし

い)と思うと同時に、造形教育は決して強いることなく、子どもが持っている潜在の力を精一杯発揮できるように「手伝ってやる」ということが、私たちの仕事と考えます。『子どものつくる喜びをひらく』はこのような考えのもと、今私たちがすべき実践課題としておさえています。

1. 教師の押しつけや主導ではなく、子ども一人一人の個性や主体性を重んじる授業づくり
2. 子どもを今まで以上に理解し、「教える」ことから「学ぶ」教育へと転換した授業づくり

を追及の中心視点と考えました。

したがって、「個性」「思いのままに」を重視することから、これからの造形教育は今までになく難しいものと思います。

造形活動において、子どもは料理人であり、決して教師が料理人であってはならないのです。料理の材料や調味料が、子どもの前に十分用意され、そして、子ども自身がその材料に向かい、料理をするからです。教師は子どもの意欲をそえて考える料理へと援助（導く）するのです。つくり手はあくまでも子どもの自身なのです。言うならば、造形教育の仕事は、子どものそれぞれにあるイメージを膨らませ、表現させることであって、教師のイメージを子どもに押し付けたり、一定の枠を与えることではないのです。

「なすことによって学ぶ」という原理は、教育指導を貫く基本と言えますが、時代背景の中で一様ではなかったようです。子どもの個性を軽視した、教師側の一方的、直線的押し付け型指導を強く想起するところです。新たに基本に関わる示唆として考えなければならないと思います。

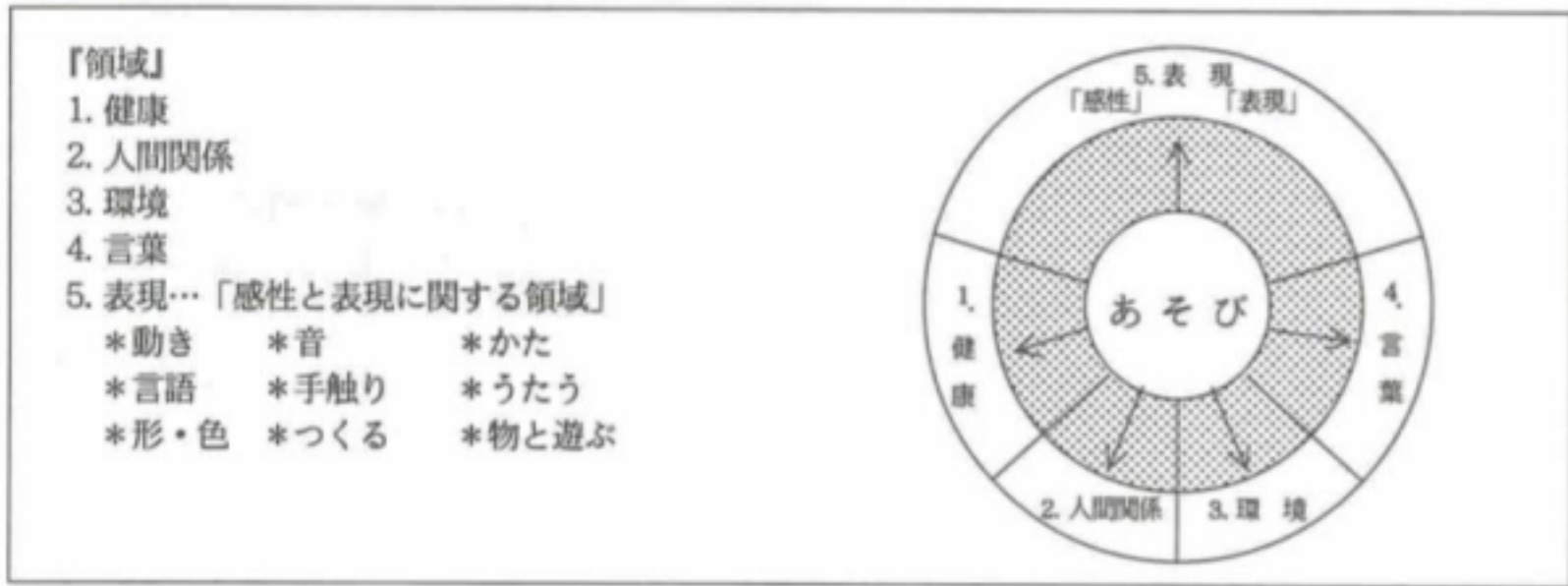
また、私たちは、急速に変わる子どもの生活からどのように子どもを見つめとらえていくかがとても大切なことです。研究主題「子どもの創る喜びをひらく」の追及視点「授業づくり」とともに、教育を受ける「子どもの見つめ直し」も同時に進めてきました。また、幼・小・中・高の一貫美術教育を考えると、児童生徒の活動の基本に『あそび』という視点を考えました。これは、授業づくりを考えていくとき、『もう一つの授業』という手掛かりを持ち、今までの実践を振り返りながら、新しい「授業を構築」していこうと考えたからです。今までのものを否定することではなく、逆に財産としておさえ新しいものを志向しようとしています。

子ども本来の本能的なものまで含めたこの「あそび」という人間的な行為や思考を大切にしていきたいと考えます。

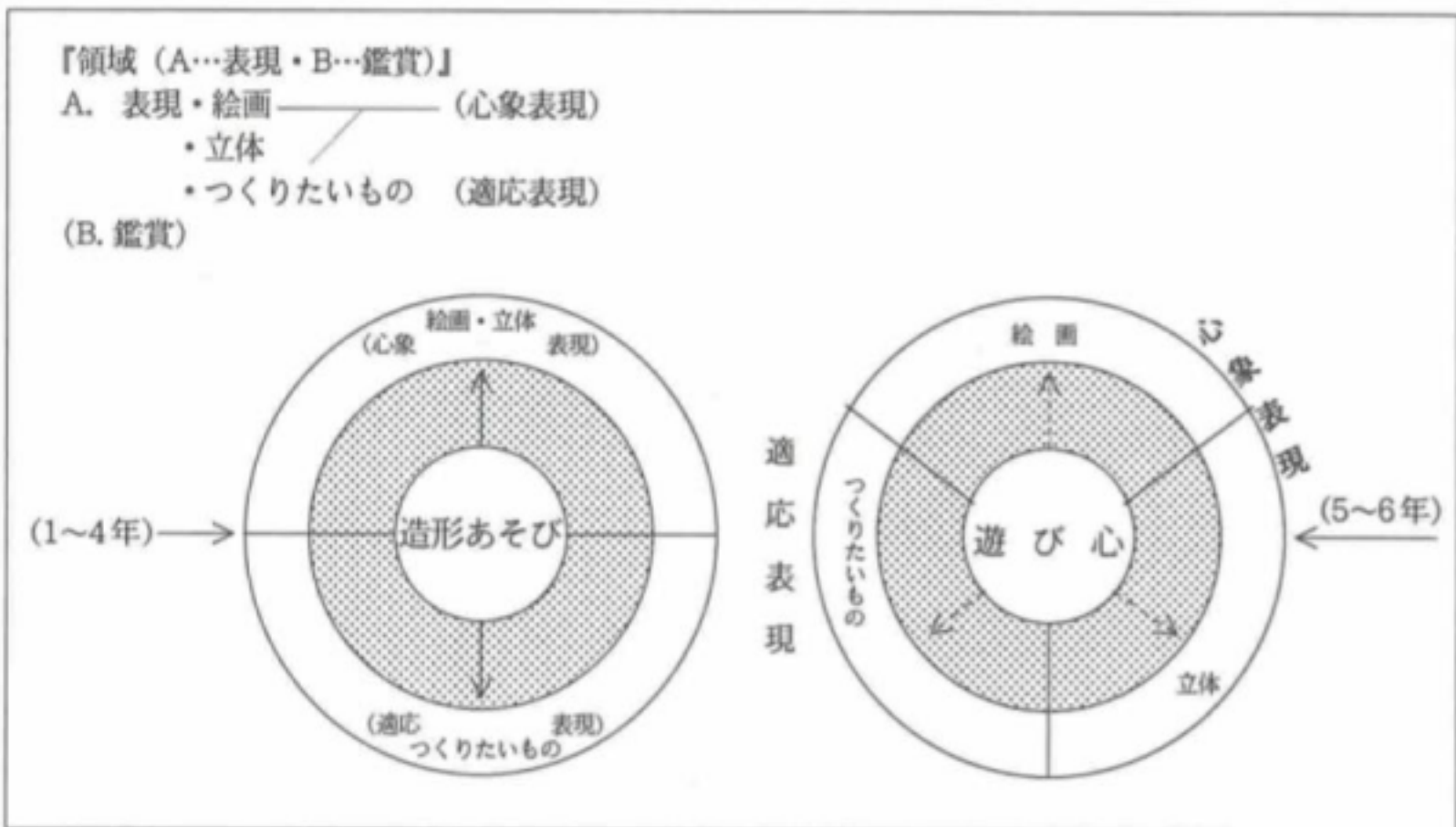
幼稚園の「あそび」、小学校の「造形あそび」、中・高等学校「遊び心」といったものを、組織的計画的な学校教育の中で実践していきたいと思えます。

幼小中高の領域構成と実践の基本姿勢（仮説）

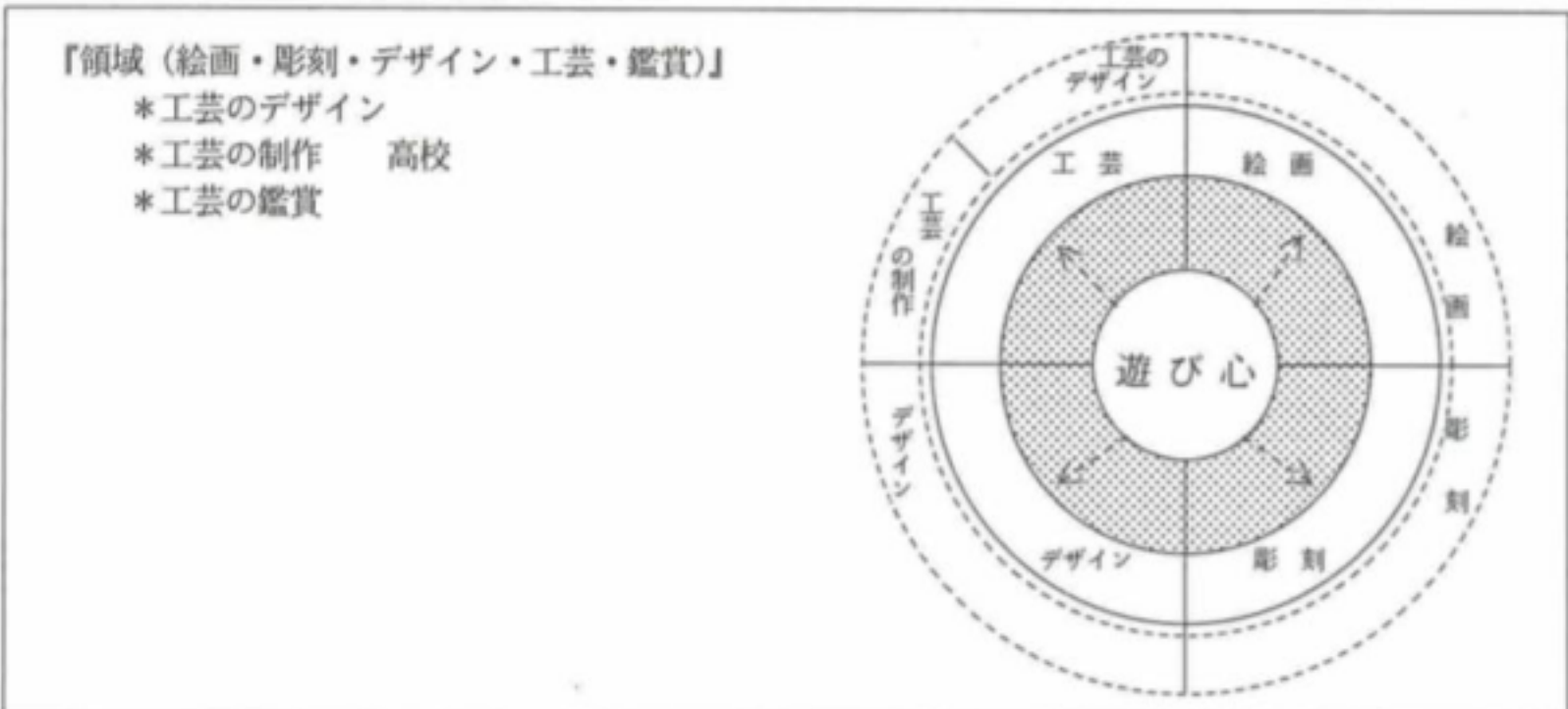
1. 幼稚園



2. 小学校・図画工作



3. 中学校・美術 高等学校・美術





日程 第1日 / 7月28日(日) / 札幌市立三角山小学校・札幌彫刻美術館

8:30	9:30	10:20	10:40	12:00	13:00	16:00	18:00	20:00
受付	公開授業	移動	開会式・歓迎 セレモニー	昼食	分科会	移動	歓迎 レセプション	

歓迎セレモニー（三角山小全校児童による）

萌えろ！みんなの三角山

登山や野原での遊びのときは、仲良しの友だちの顔。その歴史を学ぶときは、心豊かな生き方を教える母の顔で、子どもたちを見つめる三角山。

三角山の様々な表情を表わしながら、三角山と子どもたちのかかわりを紹介。

大会シンボルマーク



●中心デザイン

札幌・東栄中 六本木 祐司

雪の結晶と樹木のイメージを、造形的バランスでまとめました。

●活用デザイン

札幌・三角山小 菅原 清貴

感性の鋭さを頂点に、創造活動の豊かさを裾野とした三角山の形で、中心デザインを囲みました。

第2日/7月29日(月)/札幌市立三角山小学校

8:30	9:00	10:20	10:30	12:00	12:30
受付	クリエイティブ・プラザ	移動	記念講演	閉会式	
	中学校全体分科会				

札幌彫刻美術館 第1日目7/28(日)の入館方法 8:30~17:00まで大会参加名札の提示による。
第2日目7/29(月)は休館日。

クリエイティブ・プラザ

みて・ふれて・かんじる造形広場

三角山小学校の校地全体を『造形の海』にした会場づくり。立体の野外展示・プールを使っ
ての展示・フェンスの展示などに加えて、校内では立体平面作品の展示や授業の様子をパネルで提示し
ます。

クリエイティブプラザとして、体育館・廊下で体験コーナーを設置。子どもの個性溢れる造形活
動を進めるための実践のヒントを見て・触れて・感じる広場が好評。

中学校全体分科会

これからの美術教育 -教育課程の実践的課題-

新学習指導要領の趣旨をうけ、美術科としてどう対応すべきかなどを2人の先生の提言にもとづ
いて話し合う。

提言 奥野郁夫(札幌・柏中)・武市尚政(札幌・清田中)

司会 村谷利一(札幌・北栄中)

記録 多田紘一(札幌・柏中)

運営 角力山 旭(札幌・陵北中)

記念講演

演題『子どもの心をゆり動かすもの』

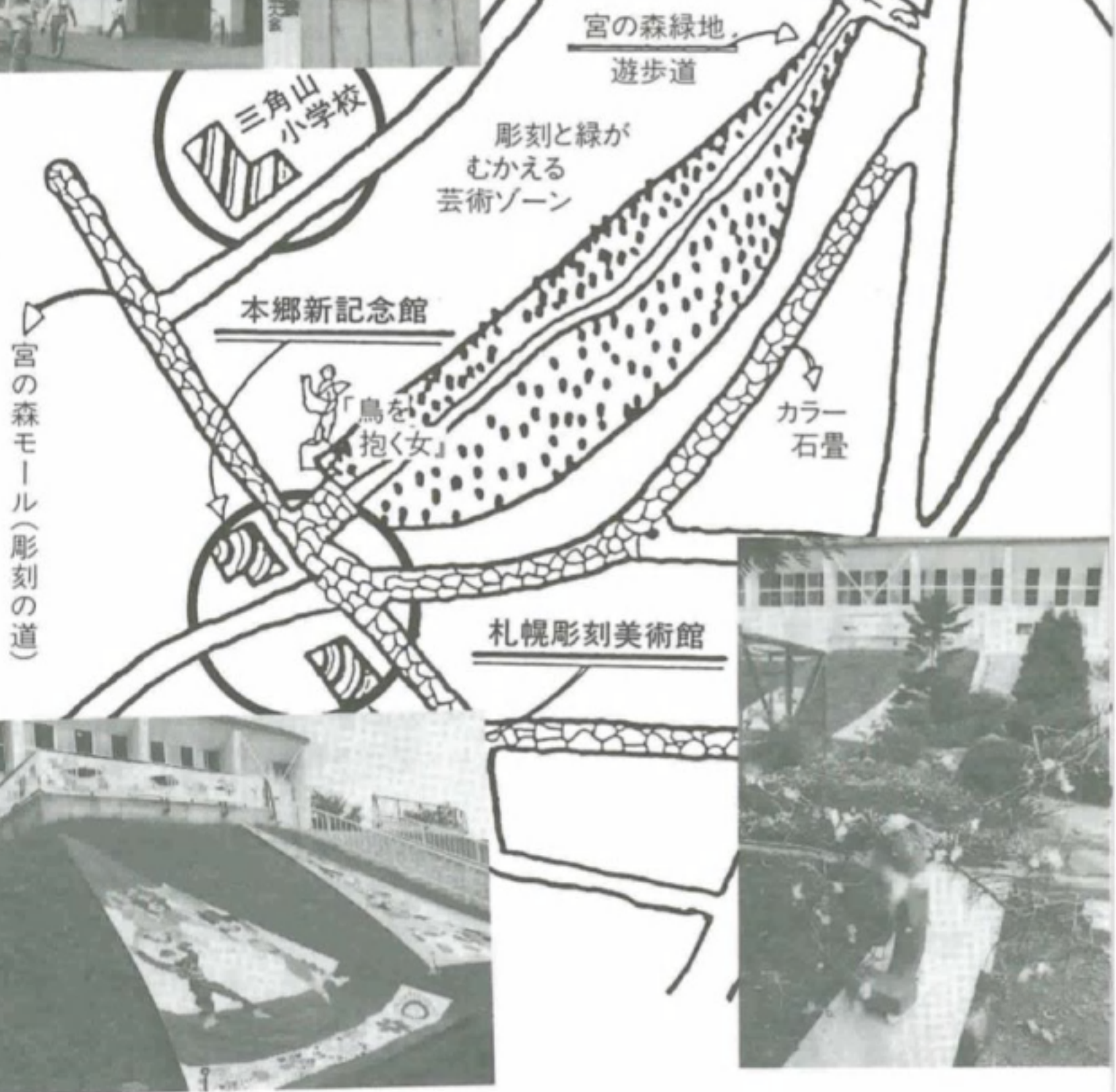
講師 シルエット・アート作家 藤城 清治氏

1924年東京生まれ。

慶応義塾大学経済学部にて在学中から油絵や人形劇に没入、卒業と同時に影絵
劇団を結成する。戦後「暮らしの手帖」TV番組「影絵名作アルバム」等で
影絵を発表し、活躍の場を広げ、1982年頃からは影絵劇で海外公演を重ねる。
著書に「影絵はひとりぼっち」「天の笛」「きん色の窓のピーター」「遠い日の
風景から」「藤城清治影絵劇の世界」等がある。

また、厚生省児童福祉文化奨励賞、芸術祭優秀賞、国際絵本原画展金のリ
ング賞等の受賞に輝いてる。





地下鉄
「二十四軒」駅



「彫刻美術館
入口」



地下鉄
「西28丁目」駅

バス停



円山

円山動物園

札幌大会 分科会構成

校種名	領域	番号	分科会テーマ	話し合いの視点
保幼稚園	表現	1	*感じたこと考えたことを表現する意欲を引き出す造形活動	1. 幼児期の造形活動をどのようにおさえるか 2. 造形活動への意欲を引き出すような環境の在り方
小 学 校	造形あそび	2	*子どもの造形性が高まる造形あそび	1. 3・4年生の造形あそびの具体化をどうはかるか 2. 子どもの活動が連続する造形あそびの題材の開発
	絵に表す	3・低	*子どもの思いがひびきあう絵画指導	1. 一人ひとりの思いを表現にむすびつけるにはどうすべきか 2. 子どもが夢中になって取り組む題材の開発
		4・中	*子どもの思いがひろがる絵画指導	1. 表現の幅を広げおもしろのままに表現させるにはどうすべきか 2. 子どものイメージがふくらむ題材の開発
		5・高	*子どもの思いが生きる絵画指導	1. 自己をみつめ進んで表現させるためにはどうすべきか 2. 子どもの思いが生きる題材の開発
	立体に表す	6・粘	*一人ひとりの表現活動に彫塑学習	1. のびのびと表現する学習条件はどうあるべきか 2. 表現と鑑賞の一貫性をどうはかるか
		7・鑑	*一人ひとりの表現活動にむすびついた鑑賞学習	1. 一人ひとりの鑑賞活動を援けるにはどういう指導が望まれるか 2. 表現と鑑賞の一貫性をどうはかるか
	つくりたいものをつくる	8・低	*つくる喜びがあふれる学習	1. 子どもの思いがあふれる教材化のあり方 2. 子どもを思いをあふれさせる教師のかかわり
		9・高	*つくる喜びが生きる学習	1. 子どもの思いが生きる教材化のあり方 2. 子どもの思いを生かす教師のかかわり
	中 学 校	絵画	10	*一人ひとりの心が拓く絵画指導のあり方
デザイン芸		11	*一人ひとりの心が拓くデザイン・工芸指導のあり方	1. デザイン・工芸の学習を通してどのように表現の喜びを味あわせるか 2. デザイン・工芸の学習を通してどのように造形能力を高めるか
彫刻鑑賞		12	*一人ひとりの心が拓く彫刻・鑑賞指導のあり方	1. 彫刻・鑑賞の学習を通してどのように表現の喜びを味あわせるか 2. 彫刻・鑑賞の学習を通してどのように造形能力を高めるか
高等学校	(全)	13	*生徒の意欲を喚起させる題材研究	(独自の題材の交流)

授業者	提言者	助言者	司会者	記録者	運営委員
西野 智子 (年長) (なかのしま幼) (副担) 大滝 明美 (なかのしま幼)	吉田耕一郎 (いなづみ幼) 柏木 順 (手稲中央幼)	森川 昭夫 (清明幼) 内田 芳恵 (なかのしま幼)	細川 依子 (清明幼) 酒井 三佳 (白楊幼)	森 美由紀 (ふくい幼) 本永 智子 (なかのしま幼)	一瀬 千恵 (なかのしま幼)
新井 弘通 1年生 (三角山小)	篠原 寛 (新陵小) 高橋百合枝 (二条小)	高橋 忠昭 (東藻琴・山岡小) 伊藤 善彬 (梶南小)	伊藤有為男 (旭川・末広北小) 宮崎 むつ (南白石小)	宗像 宏子 (緑丘小) 田中ふじ子 (梶南小)	八木 明 (三里塚小)
大場 章子 2年生 (山鼻小)	小泉 誠 (円山小) 土井 善範 (北園小)	関 建治 (石狩・花川南小) 蛭子 信也 (伏古小)	大井誠一郎 (中標津・東小) 小尾 喬 (伏古小)	平島恵都子 (しらかば台小) 高井裕美子 (北光小)	益村 豊 (前田中央)
熊谷 悦代 4年生 (三角山小)	氏家 珠実 (八軒西小) 葛西 良子 (桑園小)	笠原 金一 (伊達・長和小) 坂口 清一 (藻岩小)	山谷 礼司 (函館・昭和小) 小林万咲彦 (澄川小)	広瀬 恵子 (北光小) 塚本由岐子 (北光小)	中居 正光 (東札幌小)
稲實 順 5年生 (八軒西小)	早坂 学 (伏古小) 窪田 恵子 (山の手小)	中村 紀雄 (釧路・朝陽小) 白坂 和夫 (西岡南小)	渡辺 貞之 (深川・菊水小) 鈴村 幸司 (札幌北小)	永井 智子 (大倉山小) 高向 修子 (山の手小)	古谷 寿朗 (苗穂小)
今谷 孝 6年生 (梶西小)	小柳 雄嗣 (桑園小) 池田 悦子 (山の手南小)	成瀬 登 (帯広・森の里小) 吉田 俊雄 (二十四軒小)	佐藤 輝彦 (苦小牧・大成小) 花田 正雄 (篠舞小)	谷山 圭子 (西宮の沢小) 上田 祐子 (西白石小)	辻 喜夫 (澄川南小)
菅原 清貴 5年生 (三角山小)	板田 恭侑 (石山南小) 村田 力 (福井野小)	石井 久 (森・石倉小) 伊藤 英世 (東光小)	中村 彰 (釧路・附属小) 伊藤 暢紀 (東苗穂小)	山本 景子 (太平南小) 和田 恵子 (手稲中央小)	仁木 隆 (手稲北小)
今 裕子 3年生 (伏見小)	桜田 豊 (梶西小) 濱野 りな (澄川小)	中川真一郎 (乙部・富岡小) 谷 勲 (澄川西小)	竹内 堅治 (留萌・梶野小) 板木 武 (梶南小)	佐藤 真弓 (大谷地東小) 田中佐知江 (篠路小)	伊藤 正敏 (東橋小)
植木 則子 5年生 (桑園小)	土肥 宏充 (小野梶小) 白井 真澄 (稲穂小)	渡部 稔 (赤平・平沼中) 鶴賀 孝三 (新陵小)	出村 英和 (芽室・芽室小) 西 寛 (梶南小)	山室ゆかり (南の沢小) 木戸久美子 (共栄小)	大村 憲一 (貞駒内南小)
八重樫真一 中2年 (美香保中)	富田 賢司 (新琴似北中) 向 敏光 (平岡中)	稲船 正男 (釧路・美原中) 新谷 純鋪 (札幌中)	佐藤 公毅 (苦小牧・沼の端中) 小幡 哲也 (札幌北中)	六本木祐司 (東栄中) 西山 昇 (あやめ野中)	田中 潤 (丘珠中)
伊藤 尚 中2年 (上野梶中)	高杉 正和 (啓明中) 阿部 時彦 (南が丘中)	田邊 康夫 (函館・大川中) 平山 満 (藤野中)	長谷川政司 (留辺蘂・温根湯中) 小野 泰裕 (山鼻中)	木原 英俊 (向陵中) 菅原 尚俊 (青葉中)	岩間 歳仁 (厚別中)
中山 龍雄 中2年 (八軒中)	中尾 孝典 (日章中) 池嶋 憲彦 (稲穂中)	千葉 豊治 (旭川・六合中) 東志 隆 (新川中)	山口 長伸 (羅臼・羅臼中) 小泉 信嗣 (陵北中)	後藤 和司 (白石中) 岡島 仁志 (稲穂中)	合田 典史 (兜寒中)
	香西富士夫 (平岸高)	開沼 英則 (東陵高)	土岐 禎次 (北高)	小林 智彦 (南高)	中田 千年 (稲雲高)

目 次

挨拶	造形連盟委員長 佐々木 理 温	3
研究主題解説		4
札幌大会日程		10
会場周辺マップ		12
分科会構成一覧		14
第 1 分科会	幼稚園 表現	17
第 2 分科会	小学校 造形あそび	21
第 3 分科会	〃 絵画（低）	25
第 4 分科会	〃 絵画（中）	28
第 5 分科会	〃 絵画（高）	32
第 6 分科会	〃 立体	36
第 7 分科会	〃 鑑賞	40
第 8 分科会	〃 つくりたいもの（低）	44
第 9 分科会	〃 つくりたいもの（高）	48
第 10 分科会	中学校 絵画	52
第 11 分科会	〃 デザイン・工芸	55
第 12 分科会	〃 彫刻・鑑賞	58
第 13 分科会	高等学校「題材の研究」	61
中学校全体分科会	「これからの美術教育－教育課題の実践的課題－」	63
* 巻末付録・速報コーナー		66
編集後記		

第1分科会記録

分科会テーマ

『感じたことを表現しようとする意欲を引き出す造形活動』

授業者	なかのしま幼稚園	西野智子
	なかのしま幼稚園	大滝明美(副)
	題材名『がっきをつくろう』	
提言者	札幌市立いなづみ幼稚園	吉田耕一郎
	札幌市立手稲中央幼稚園	柏木順
助言者	清明幼稚園	森川昭夫
	なかのしま幼稚園	内田芳恵
司会者	清明幼稚園	細川依子
	札幌市立白楊幼稚園	酒井三佳
記録者	なかのしま幼稚園	本永智子
	札幌市立ふくいの幼稚園	森美由紀
運営委員	なかのしま幼稚園	一瀬千恵



1. 授業について

(1) 授業者から

- ・ 楽器作りについて（取り上げた理由・過程）
 - ・ 普段は本日の倍の人数で私語の多いクラスなので、発散できる場を作り集中力を付けたいと考え楽器作りを取り上げた。
 - ・ 音遊び…体・紙等身近な物から音を探し始めいろいろと試していった。その中で、紙を使って海の音を出したり、空缶の中に五円玉を取り付け風鈴作りをしたり、

失敗を繰り返しながらも意欲を持って幾つかの楽器作りを経験している。

・本時について

- ・以前プリンカップで音探しをしたためプリンカップを使う子が多かった。
- ・瓶と瓶をつなぐ時に押さえてあげたり、協力し合う場面が見られていた。
- ・接着するときにはビニールテープを使ったり、自分たちで考えて選んでいる姿が見られた。
- ・いつもと異なり手作りの紙芝居を見せたので、目新しさもあって見入ってしまった、音を出すことに集中出来ず、思っていたような反応が見られなかった。
(大滝)
- ・障害のある幼児が欠席だったため、健常児と一緒に活動している様子を見ていただけでなく残念だった。
- ・同じ物を選んでいる幼児に対してもう少し違った援助の仕方があったのではないかと反省している。

(2) 話し合いから

*教材選びの観点はどこにあてたか？

- ・音の出るもの、出ないもの等幅広く用意し、試しながら選択できるように配慮していった。

*紙芝居を取り入れた意図は？

- ・今までに、雨の音・象など動物に合った音を出したりしてきた。今日は三匹の大中小の山羊、嵐等に自分なりにイメージした音を付けながら、話に参加しながら聞くことを計画した。

*感想として

- ・たくさんの材料が揃えられていたので、幼児がいろいろと考えて選択できたことは、環境として良かった。
- ・「造形」「楽器」「紙芝居」をつなげて活動としたことは、斬新で参考になった。
- ・教師の笑顔や子どもとの接し方がとても印象的だった。

*カリキュラムについて

- ・教師はある程度の見通しを持ちながら、幼児の実態把握を十分行い、見直しながら、幼児が『やってみたい』という気持ちが持てる活動を取り上げるようにする。

(3) まとめ

- ・話の内容が、小さい声でわかりやすく話していた。
- ・鏡を覆う等、環境作りが良かった。
- ・ビニールテープを切ったりする時に、長さを考えて切っている様子が見られ、慣れているということがうかがえた。
- ・紙芝居のときの「音やめタンブリン」は、子どもに任せたほうが良い。
- ・視覚的な刺激だけではなく、体感したことが、造形活動に生かされていく。

2. 提言について

(1) 提言1……吉田耕一郎（いなづみ幼稚園）

- ・ 現在5歳児担当。「描きたい対象・描く状況作り」が大切。
経験画は楽しさを表現できるか？自分の感じたことを描き足して表現することが必要ではないか。
- ・ スライドを見ながら、「虹の絵」「山の絵」について説明を受ける。
片付けの時に団地にきれいな虹が掛かっていたので、教師が外に出て虹を描いたことがきっかけで、おやつの後で子ども達が次々と描き出した。同じ経験をしたとしても、その経験の仕方と感動の違いや表現の違いが生まれてくるのではないか。「山の絵」絵を描くということが身近なものとなった時に表現しようという気持ちをもてるのではないか。環境として何時でも絵の具を使えるようにペットボトルに絵の具を作って置いておく。色水遊び・絵を描くなど楽しさを味わっている。一斉で取り上げるよりも強制しないで自由に取り組めることが大切なのではないか。（一斉…同じテーマで描く機会）

(2) 提言2……柏木 順（手稲中央幼稚園）

- ・ スライドを通して説明を受ける。
- ・ 図式的な絵、キャラクターの真似や、決まった形の絵のような、概念的な絵を描く子が多い。また、絵を描けない子がいる。経験し、自分の表現で描くようになるために、環境作りに配慮している、マジック・画用紙等を使いやすいように保育室に用意しておき、床などどこでも描けるようにしている。長所、表現が自由である。欠点、一斉ではないため、絵を描くことが嫌いな幼児はほとんど描くことがなく、同じパターンの絵や画一的なものから脱け出せない。描けない子は、砂遊びなど汚れることを嫌がる傾向がある。砂遊びの中で円を描いたりすることを通して、お母さんの顔を描くようになった。概念的な絵を描く子には、昨日何をして遊んだのか等、実際に経験したことを課題にして、まだ十分育っていない表現力を直接的・具体的に指導することが必要であると考えている。

(3) 話し合いから

- * どういうときに一斉で取り上げているのか。
 - ・ 一斉で行うメリットがどこにあるのか。一斉で行うことの強制が描いていて楽しくないと思う子もいる。皆で行うから表現が芽生えることもあるとは思っている。絵を貼るかどうかは本人の意思ではないか。
- * 概念を持つ以上のことを求めてはいないか。
 - ・ 概念を模倣するだけでなく、自分の考えや経験を少しでもいれて描いて欲しいと思っている。
- * どうしてキャラクター等の概念的な絵を描くことがいけないのか。それもその子の

一つの表現ではないか。

(4) 助言者より

- ・ 概念的な絵を描くことは、発達段階として必ず通るもので正常な成長。
子どもが自信をもって描いているなら、たくさんほめて、ほかのものを描いてみようとするまで待ってあげることのほうが大切。無理して描く気のないものを描かせない方がよい。
- ・ 概念で選んだもののイメージを大切にしておいて、どこを刺激すれば楽しく描けるかを考えて指導に当ることが必要ではないか。
- ・ 『絵を描くこと』は『遊び』である事を感じさせるように、おおらかな気持ちでみてあげようとする。
- ・ 年齢に応じた絵や描く機会が必要。
- ・ 絵に表すだけが表現ではない。個人差があるので、いろいろな遊びの中で、表現する機会を持ち、表現力を豊かにしていく事も大切ではないか。



第2分科会記録

分科会テーマ

『子どもの造形性が高まる造形遊び』

授業者	札幌市立三角山小学校	新井弘通
	題材名 『ふくらませてふくらませて』	1年生
提言者	札幌市立新陵小学校	篠原寛
	札幌市立二条小学校	高橋百合枝
助言者	東藻琴村立山園小学校	高橋忠昭
	札幌市立幌南小学校	伊藤善彬
司会者	旭川市立末広北小学校	伊藤有為男
	札幌市立南白石小学校	宮崎むつ
記録者	札幌市立緑丘小学校	宗像宏子
	札幌市立幌南小学校	田中ふじ子
運営委員	札幌市立三里塚小学校	八木明



1. 授業について

(1) 授業者から

・ 授業づくり（日常の実践）

このビニール袋を使った造形遊びの題材では、本時の前に『ごみ袋のらっかさ』をやっている。この時はじめてビニール袋をあたえた。「遊んでごらん」と言って自由に遊ばせると、まず袋をふくらませてとぼして遊び始めた。そのうち、袋をしばったり、うさぎに見立てるなど活動していった。しかし袋の大きさに制限があるので、袋の輪をとって活動した。その他にも、身につけたり走ったりなど

色々な活動をしている。

・ 本時について

十分にビニール袋にふれてほしいことと、全員が楽しく遊んでほしいと考えていた。授業の最初に、教材との出会いで子ども達が「ワアー」と歓声をあげてくれたことで、この教材を子ども達が喜んで受け入れてくれたと思った。教材に充分親しむ活動を考えていたので、終始遊ぶような活動になったけれど、子ども達はそれぞれ袋を組み合わせてイカダをつくったりして活動を広げていったのでよかった。

(2) 話し合いから

* 場の設定について

- ・ 子ども達が満足できる場になっていたので良かった。

* 教師のかかわりについて

- ・ いろいろな活動がみられたが、よい活動をしている子のほうに全員の意識を集中させるために、子ども同志に交流させるような教師のかかわりの工夫があってもよいのではという考えもあるが、ここでは一人ひとりの子どもの活動を大切にすると、さまざまな活動に取り組んでいる子どもの活動を途中でやめさせたくない考えで、途中での全体交流はさせないほうがよい。ただ同じような活動をしている子ども同志に働きかけるようなかかわりはあっても良かったかもしれない。中には、子どもたち同志で良いところのまねをするなど自然に交流が見られた。発想のわからない子に対しては、他の子とのかかわりを促す教師の積極的なかかわりが必要ではないかという意見もあるが、自分から発想することが造形活動で大切で、自分から素材に自発的にかかわるべきである。最初から最後までとぼして遊ぶ子がいたが、造形活動に発展しない子にとってはその子なりに袋をとぼして遊ぶという目的を達し、満足していたので教師がかかわらなくてもよい。子どもの願いや思いから出発して教師はその思いをつなげるように援助していくことが大切である。

* 素材について

- ・ とても長いビニール袋は1年生の素材としてはとてもよかった。身近なものでありながら、子どもの造形意欲をわかせる物であることがよかった。

(3) まとめ

- ・ ビニール袋という素材では、形をいかに変化させていくかという遊びをさせることが大切。子どもたちに物の見方（バランス・リズム）という力をつけていくには、いかに経験をたくさんさせるかである。
- ・ 遊びには様々なルールがあり、それを教師はかみくだいて子ども達にわからせていくことが大切である。
- ・ 遊びの中に一人遊びではなく、仲間をつくって遊んでいた。これは、後で共同製

作などにつながっていく。

- ・自分が満足するまで表出させていく段階を大切にしていかなければならない
- ・遊びの中に造形要素があり、それを繰り返し子どもに経験させることが大切である。

2. 提言について

(1) 提言1……篠原 寛（新陵小学校）

- ・中学年の造形遊びは低学年と違って見通しを持って材料を集めてたり、計画をたてて遊びながらつくりあげていく活動ではないかとおさえている。

* 「自転車カーニバル」の実践から

- ・校区が都会の住宅街であるため、自然の材料は手に入りにくいので、身近な物として自転車を取り上げ“自転車大変身”“自転車大改造”と言ってなげかけた。条件として「乗れること」とした。一人ひとりの活動を期待したが、自然にグループごとの活動になった。材料集めの前に変身する自転車の名前を考えさせた。どのように変身するかもグループで相談し必要な材料や用具を集めさせた。変身した自転車にあうように、乗り手も変身して「自転車仮装大会」をした。アイデア賞やユーモア賞などをみんなで決めた。

* 「おまつり」の実践から

- ・学級レクで、親たちが出店などのお祭りをするようになった。親達の要請で子ども達も出店を開くことになった。校庭のすべり台やジャングルジムなどの空間を利用して、すべり台でゲーム屋さん、ジャングルジムの所で立体迷路など7店が開店することになった。グループづくりは子どもにまかせた。ダンボールをかなり用意したが、屋根や敷物など子どもなりに工夫していた。子ども達にとっては、お母さんたちに見てもらえること、店を作ったあとお祭りで楽しめることなどで意欲的に楽しんで活動した。

(2) 提言2……高橋百合枝（二条小学校）

* 「ガラクタランド・パートI」の実践から

- ・「廃物からイメージをふくらませて活動できないか」と考えて、テレビや時計などがらくたを集めをした。「これを何かに変身できないか」というなげかけをした。ジャガイモ栽培時に使ったタップボトルがきっかけでタップボトル集めから始まり、ボトルで遊ぶ中からボトルで家を作る計画がたった。活動ごとにグループができ、失敗しながら工夫して作っていった。現実と予想のギャップから、失敗しながら試しながら取り組むところと、頑張っあきらめずに取り組むことを願った。

(3) 話し合いから

*材料集めについて

- ・材料の部屋などを用意して、ふだんから集めておくことが望ましい。同じ材料を集めるには時間がかかる。

*条件設定について

- ・発想を高めるためには条件の設定も大切である。子どもの意欲がわくような条件の設定はよい。

*教師のかかわりについて

- ・子どもの後に立って、子どもの思いを広げられるような教師のかかわりが大切。

(4) まとめ

- ・二人の実践はグループになっての活動であったが、一人ひとりの活動がどのように全体に広がっていくのかが大切である。

低学年…作っている時が遊んでいるとき
中学年…作ってから遊ぶ

- ・今まで経験してきた材料が身近になればいけない。

材料を選ぶ視点

- ア. 感性をくすぐれるか
- イ. 興味、関心が続くか
- ウ. 創意、工夫にたえられるものか
- エ. 今までの経験が生きるものか
- オ. 行動できるものか

- ・条件には材料的条件と機能的条件がある。
- ・低学年では経験を豊富にし、中学年ではそれを生かした活動を考えていく。
- ・身近なものをいろいろ集めて、いかに身近な材料に眼をむけさせていくのか、いかに発想を広げさせていくのかが重要である。

第3分科会記録

分科会テーマ

『子どもの思いがひびきあう絵画指導』

授業者	札幌市立山鼻小学校	大場章子
	題材名 『ざりがにさんとたんけんだ』	2年生
提言者	札幌市立円山小学校	小泉誠
	札幌市立北園小学校	土井善範
助言者	石狩町立花川南小学校	関健治
	札幌市立伏古小学校	蛭子信也
司会者	中標津町立中標津東小学校	大井誠一郎
	札幌市立伏古小学校	小尾喬
記録者	札幌市立しらかば台小学校	平昌恵都子
	札幌市立北光小学校	高井裕美子
運営委員	札幌市立前田中央小学校	益村豊



1. 授業について

(1) 授業者から

見栄えのする絵（中心を大きくかかせる）、遠目のきく絵になるように今までは指導してきた。また、描画材料も教師の方から指定してきたわけであるが、このような教師主導の授業を続けていくことが子どもの描きたい意欲を喚起することにつながるのか疑問に感じてきた。もっと描く楽しさや創造していく喜びを味わわせたい、子ども主体の授業を……ということ考えてみたのが今回の授業である。

今までの経験を土台にし、表現方法を子どもたちに委ねてみた。

一人ひとりの子どもの表現に関する持ち味をとらえ、それをその子の表現に生かしていくよう心がけている。(座席表も利用)一人ひとりの表現のよき援助者になるような関わりをしていきたいと考えている。

今日の授業では、3人の子に対する関わりが良くなかったことを反省している。

本時の教師の関わりが適切であったのかということ、試し遊ぶこと自体が子どものイメージをふくらませるのに有効であったのかどうか等について教えていただきたい。

(2) 話し合いから

- ・ 教師が一人ひとりにどのように関わっているのか、よく見える授業であった。一人ひとりの個性を理解してこれからも教師がどのように働きかけていったら良いか、話し合うべきである。
- ・ 昔“かきたいものを大きくかかせる”ということを知ったが、ドラマ性がなかった。今日の絵にはドラマ性があり、子どもたちは楽しくかいていた。
- ・ 「あれをやっても良いか」とはみ出そうとする子を止めてしまえば、その子の願いはそこでストップすることになる。多様な表現技法を認める、いろいろな材料を使わせてやること、そのことが表現に広がりや深まりを出すことにつながる。
- ・ 表現材料に幅を持たせることは冒険である。そこへ行くまでに教師がいろいろやらせているからこそ出来た。受け手と送り手という子どもと教師の関係、子どもがいろいろ表現した時に受け止めてくれる先生(親)が大事である。
- ・ 幼児期最後としての低学年の特徴的な描法(回転描法、レントゲン描法など)も見られる。これらを十分に堪能させるべきであろう。先生のほうから提示した背景の参考作品はなくてもよかった。参考作品がなくても、子どもは自然に自分なりの描法でかいていける。
- ・ この絵にも中心はある。大きさではない。色や形を見ると読み取れる。一場面しかかけない子はそれでいい。おしゃべりな子はどんどんかいていく。

(3) まとめ

完成した作品は、今までの作品と比べると魅力のないものかもしれない。見栄えのする絵ではなく、画面の中で遊ぶということを重点にした今回の授業は、新しい絵画指導への大事な問題提起となる。子どもがどれだけ自分の気持ちをつぎこんで遊べたかを見取ることが重要になってくる。

今後は、色と形のこだわりを捨てずに、子どもの思いを大切にしていける指導のあり方を課題として取り組んでいくべきである。

2. 提言について

(1) 提言1……土井 善範（北園小学校）

一人ひとりに情情的にも造形的にもイメージが生まれやすい題材（海の中はすてきだったよ！）を設定し、表現の段階では従来の教師主導型ではなく、自分の表したいところから進めていけるようにした。また、材料も自分で選択していけるようにして、「思い」をよりダイレクトに表現に結び付けるような構成にしてみた。

イメージをじっくりわかせるために、また、自由な中にもその子に近づいていくために、「図工がんばりカード」をつくった。どの子どもとても楽しそうに描いていた。チマチマしたもののがなくなり、絵が変わっていった。（やりすぎて少しくどくなっていくものもあったが……）

(2) 提言2……小泉 誠（円山小学校）

………技法遊び（かたつむりの絵他）、版画の集団画を提示………

絵画指導では人間性、創造性をふくらましていくことが大きなねらいで、教師の役割は子どもの援助をすることである。子どもの絵から、子どもの背景にあるものや子どもの生活自体を読み取る力をたくわえていかなければならない。技術は教師が絶対に持っていなければならない。情報を提供していかなければならない。

低学年は部分でほめる、中学年は全体で、高学年は「これもいいねでも、こうすればもっといいね。」という具合にほめるとよい。発達段階を知らなければ個性を伸ばせない。教師主導、児童中心、どちらもよくない。育てるもの、教えられるもの、教えてはいけないものを教師がはっきりと見極めて指導していくことが大切である。

(3) 話し合いから

- ・ 子どもたち一人ひとりのカルテがある。その他に、友だち同士で教え合うというコミュニケーションも大切である。
- ・ 言語と絵画が混とんとしている時期（2年生）にカードは有効に使うべきである。言葉に置き換えてイメージさせたりすることは、最初の試みとしてはよい。

(4) まとめ

- ・ 「がんばりカード」は、子どもの実態をみて取り入れるかどうか決めるとよい。
- ・ 図工の時間に、らくがき（子どもが一番好きな絵）的なものを取り入れてやることも考えていくべきである。
- ・ 低学年の場合は、生き生きと大きくとらえる絵にしていきたい。
- ・ 子どもの多様性をどうとらえ、一人ひとりにどう働きかけていくかということを教師はよく考え、いろいろな試みを重ねていくことが大切である。
- ・ 造形要素（発達段階に合った）をどう教えていくかが大事である。

第4分科会記録

分科会テーマ

『子どもの思いがひろがる絵画指導』

授業者	札幌市立三角山小学校	熊谷悦代
題材名	『三角山の春夏秋冬』	4年生
提言者	札幌市立八軒西小学校	氏家珠実
	札幌市立桑園小学校	葛西良子
助言者	伊達市立長和小学校	笠原金一
	札幌市立藻岩小学校	坂口清一
司会者	函館市立昭和小学校	山谷礼司
	札幌市立澄川小学校	小林万咲彦
記録者	札幌市立北光小学校	広瀬恵子
	札幌市立北光小学校	塚本由岐子
運営委員	札幌市立東札幌小学校	中居正光



1. 授業について

(1) 授業者から

- ・学級の実態として描くことに抵抗のない子どもたちである。トレーニングは行わず水彩指導として3時間行った。
- ・「写生会（ガソリンスタンド）」「お話の絵」を事前に経験している。
- ・今回のガラスに関しても教師側からの強い指導は行わなかったが、時折造形指導を語りかけの中にいれた。
- ・今回のガラスの絵に関しては、手に持って垂れない程度に水を切るように指導した。

- ・色数を多くすることに対して、楽しみを持って。 (おもちゃ箱をひっくり返したように色々な色を使うのを好む)
- ・今回のようにガラスに描くこと、また事前研究会で行った布に描くことは新鮮だったので喜んで行った。
- ・ガラスは熱いお湯で拭き取ることによって、絵の具がのりやすいことがわかった。
- ・大きな筆で描くと筆のあとが残るので、アクリル樹脂も用意した。また貼ったり押し付けたり色々試みた。
- ・材料は教師側で用意し使い方を説明したが、使うかどうかの判断は子どもに委ねた。「風」について教師側から指示した。

《題材開発に関わって》

- ・ガラスに描くことの抵抗感はあったように思うが、事前の布に描く経験が水の量や絵の具の量などの気遣いが適度な緊張感につながってよかった。
(布のよりガラスの方がスースー塗れる)
- ・今までは絵を描くのが紙が中心であったが、布、ガラスなど描材の幅が広がってきた。

(2) 助言の先生から

- ・4年生という発達段階から考えて、グループによる主題の決定は難しかったのではないか。
- ・ローラー幅が1種類だったが、他に子どもたちからの要望はなかったか。
- ・ガラスに描くということは、先生方の概念を破るものであった。
- ・指導者の感性が子どもの感性を引き出す。
- ・今回の授業は先生の教材研究と計画的な取り組み、そして指導技術がよかったので成功した。
- ・子どもに対する助言は「これは、どう？」という程度のヒントを与えるぐらいでよい。子どもに考える余地を残しておく。
- ・透明なガラスに描くことの美しさは心に残る。また想像力をふくらませる。

2. 提言について

提言1……氏家 珠実 (八軒西小学校)

『もしも、自転車で海底をはしるとしたら』4年生

- ・もしも、自転車が海の底を走れるとしたら、周りの海の様子はどのようになっているか。話づくりをしながら想像していく。
- ・自転車については実際に見せて描かせた。
- ・以前、海の色を表現させたいときには青に近い色を3色くらい作って、それを使い分ける混色指導を行っていたが、今回は行わないで実践した。

- ・自分で考え作った話なので、どの子も描くことに熱心であった。
- ・彩色の指導に関しては、「ぼかし・グラデーション」を指導した。
- ・うまさを競い合う絵ではなく自分の楽しみ、自分が楽しんで描く絵が大切であると考え実践している。
- ・写生会（見て描く絵）なども対象となるものに愛情を持っていると生き生きした絵になる。また、教師からの愛情を持たせるような助言や指導の語りかけが大切である。
- ・写生会の絵（農試公園2年生）ではたっぷり描かせるようにした。ひと鉢栽培（2年生）は愛情を持って育てているものを題材にして、ていねいに描かせる。長い間取り組んでいる題材を取り入れていくことが、子どもの絵にも自然に表れてくる。

提言2……葛西 良子（桑園小学校）

『桑園をみつけよう』 3年生

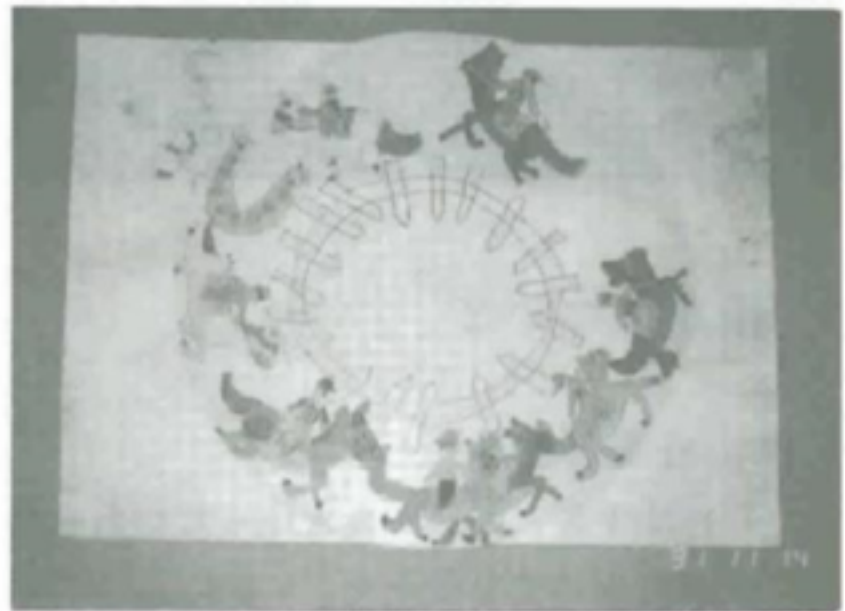
- ・3年生なので絵の具遊び（にじみ）を通して、筆の使い方、絵の具の量などを学ばせたいと考えた。
- ・抵抗感を持たせるために、円い紙を用いた。「地面は下だ」という概念をくずしたかった。
- ・台紙にはマーブリングの技法を用いて四隅にだけ彩色した。また、動くことを題材にしたので動かしたい子どもには、中央に割ピンを使って回るようにした。
- ・動くことを題材にしたので競馬場、桑園駅、問屋、倉庫群を円の縁を基底線にして描かせた。（桑園小学校の校区）
- ・マーブリングの方法は、パットに水を入れ油性の版画インクを落として少しかき混ぜ一番かっこいいときに入れるように指導した。
- ・円い紙に描くなど、教師自身の発想の転換が、子どもの発想の転換を促すことになる。

3. 話し合いから

- ・円に描かせたり、工作用紙に描かせたりしたが、これは色々な材料に出会わせることが表現の幅を広げることになると確信した。
- ・授業が一単元に留まらず年間指導計画など学校教育全体のものとして取り組まれている。（特に三角山の実践）
- ・指導を通す中で、子どもは教師が見える範囲よりも広い、見えないものまで見えるような眼を持ち始めた。子どもの思い、子どもの興味関心のあるものを、どう教材化していくかが教師の大切な役割になる。
- ・教師のイメージで教え込んでいたので、絵に対する拒絶反応を起こした。それを契機にして、子どもと一緒に遊ぶことから始めた。
- ・見て描く実践は、理科的な絵を描かせたがるが、それをどう造形的な絵に変化させ

るかを考えるのが図工の教師の役割である。高学年であれば100枚程度のクロッキー帳を持たせてたくさん描き、その中から物語の絵になるものを選ばせることもよい方法である。

- ・ 想像する力を引き出す教師の役割がこれから特に要求される。例えば、導入場面を工夫する・具体的な事物を見せながら行うことも大切である。
- ・ テーマに関わって…「子どものイメージがふくらむ題材開発」
子どもが喜々として創り出す授業となるのは、身近なもの好きなものだから大切に真剣に取り組む。



第5分科会記録

分科会テーマ

『子どもの思いが生きる絵画指導』

授業者	札幌市立八軒西小学校	稲 實	順
	題材名 『ぼくの夏・わたしの夏』	5年生	
提言者	札幌市立伏古小学校	早 坂	学
	札幌市立山の手小学校	窪 田	恵 子
助言者	釧路市立朝陽小学校	中 村	紀 男
	札幌市立西岡南小学校	白 坂	和 夫
司会者	深川市立菊水小学校	渡 辺	貞 之
	札幌市立札幌北小学校	鈴 村	幸 司
記録者	札幌市立大倉山小学校	永 井	智 子
	札幌市立山の手小学校	高 向	修 子
運営委員	札幌市立苗穂小学校	古 谷	寿 朗



1. 授業について

(1) 授業者から

- ・ 作品主義、画一主義といった傾向を見直し、教師主体の授業から子ども主体の授業の組み立てを試みた。

- ・ 教師はよき助言者となる
- ・ 子どもの「想」を大切にす
- ・ 自己主張する場を多くする
- ・ お互いの考えを尊重し合う場を大切にす

- ・ 図工を楽しみながら知的好奇心を触発するような内容の教材を取り上げる。
- ・ 表現に必要な基礎基本になる先行経験を身につける。
- ・ 自由な発想や個性を互いに認め合う学習集団の形成を図る。
- ・ 目的意識を持たせ持続させていく。

(2) 話し合いから

- ・ 基礎技術の「どんなことを」「どこまで」教えるのかというのは永遠のテーマであるが、少なくとも子どもの持っているイメージをできるだけ持続させてやることが大事である。
- ・ イメージと表現がどう結び付いていくかは難しいところだが、今回は季節感を色におきかえることによって、うまく表現に結び付いたようである。
- ・ お互いに鑑賞することによって、学び合いの場が広がり、よりよい表現に結び付いていく。
- ・ 系統的な指導によって、子どもの側にいろいろな技法が身に付き、それらを子どもが自分なりに判断し、取捨選択し楽しみながら表現していこうとする気持ちが「遊び心」と考えられるのではないか。
- ・ 自由さの範囲は、教師側の目標の範囲の中での自由さと考える。

2. 提言について

(1) 提言者から

提言1……早坂 学（伏古小学校）

「誰も知らない世界を〇〇〇で旅する」

- ・ 主体的、個性的な作品をめざして、自由なイメージの創造と技法の工夫をねらった。
- ・ 事前に…遊び感覚で技法指導
 - A. 父の日やクリスマスのカードを作ろう
 - B. 自分のPRのポスターを作ろう
- ・ 「誰も知らない、私だけが知っている、もう一つの世界を想像しながら…で旅する様子を工夫して表してみよう」と投げかけた。
- ・ 表現の手だてのために画材を用意
 - (・ 工作用紙・クラフトボード・ローラー・ぼかし網など)
- ・ また、表現する技法として指導したこと
 - (・ スパッタリング・マーブリング・コラージュ・ローラーステンシル・にじみ・ドリッピング・デカルコマニーなど)
- ・ お互いに交流を大事にしながら、楽しく鑑賞した。

提言2……窪田 恵子（山の手小学校）

「三角山の見える風景」

- ・ 子どもの思いが素直に表現できる学級の雰囲気づくりと、その思いを簡単な作文に書かせることにより、情動的な面からも表現に結び付いていくのではないか。
- ・ これからの造形教育の一方法として、三角山シリーズにし「三角山と友だち」「三角山のみえる風景（写生会）」「三角山をいろいろな描き方で」「三角山に対する夢や願い」など、一連の流れの中で、子どもたち一人ひとりの個性的な表現をねらってみた。
- ・ 今後の造形教育を見通して、教師主導型から子ども主導型へ移行していくよう心がけてきたが教師はもとより、子どもの側にも頭の切り替えが必要であった。
- ・ 身近な地域の素材を取り上げることによって、子どもたちの思いは広がり、自らつくる喜びにつながっていくのではないか。

(2) 話し合いから

- ・ 先生に遊び心がなければ、子どもに遊び心はでてこない。
- ・ 心とわざと道具がそろってはじめてよい作品が生まれてくる。
- ・ 子どもの思いを生かすことと指導のかかわり加減が難しい。

* いろいろ実践していて苦労したこと

稲實一・ 時間をいかに生み出すか

- ・ つくる喜びをいかに子どもに与えていくか

早坂一・ 技法指導の時に楽しくやる

- ・ 作ったものを生活に取り入れるようにする
- ・ 時間の生み出し方

窪田一・ 時間の生み出し方と時間内に終わらせるのに苦労した

- ・ 色の勉強も必要と感じた

3. 指導助言

- ・ 子どもの学習したことが、次回の作品に生かされるという指導がよくいきとどいていた。
- ・ 子どもが素材と出会い、それを表現につなげようとフィルターに通すとき、しっかり支持してやるのが教師である。
- ・ 本時の授業は、発問と答えだけで終わったが、そこにもう少し意欲化につながる何かがあったら、もっとよかったのではないか。
- ・ 子どもの遊び心を生かしながら、子どもの内面に迫った作品になった。さらに試行錯誤しながら自分の思いを表現するにはよい題材であった。（早坂）
- ・ 系統的に授業を組み立てることによって、子どもの表現力は高まってくる。色彩指

導はもっと必要である。(窪田)

- ・子どもたちは、いろいろな試みをやりながら、その中で自分の技法をつかんでいくのが大切である。

4. 分科会の討議から

- ・いろいろな場面でいろいろな試みをやりながら自分の技法をつかんでいくように、教師は体験の場を広げていくように心がけていかなければならない。

5. 研究の成果として

- ・子どもの思いが生きるというのは自分のイメージに合わせて、やる気を持ち主体的に取り組んだ時に、その成果が表れると考える。

そして、子どもの自己の確立のためには、どう教師がかかわっていかなければならないのかを常に考えながら実践していかなければならない。



第6分科会記録

分科会テーマ

『一人ひとりの想いを生かす彫塑学習』

授業者	札幌市立幌西小学校	今谷孝
	題材名『決めろ！組体操』	6年生
提言者	札幌市立桑園小学校	小柳雄嗣
	札幌市立山の手南小学校	池田悦子
助言者	帯広市立森の里小学校	成瀬登
	札幌市立二十四軒小学校	吉田俊雄
司会者	苫小牧市立大成小学校	佐藤輝彦
	札幌市立簾舞小学校	花田正雄
記録者	札幌市立西宮の沢小学校	谷山圭子
	札幌市立西白石小学校	上田祐子
運営委員	札幌市立澄川南小学校	辻喜夫



1. 授業について

(1) 授業者から

- ・「遊び心」を彫塑学習にどのように取り入れるかむずかしい点があったが、子どもたちがよくがんばっていた。
- ・芯材を組み立てるときに指導したことは、プロポーション、関節によって動きが決まるということ、腰と肩をつけるということなど。また、五体の比率（頭・胴体・腰・手・足）に注意させた。芯棒の使用で動きが限られてしまう面もあるので、5年生のときから、関節を意識して動きを表現させてきた。今回の授業では、あまり指示し

なかったが、去年の経験が生きていたと思う。

- ・粘土の量を加減させた。特に力が入っているところ（筋肉の盛り上がり）に粘土を付けすぎないように指導した。ねらいは人物の動きなので、筋肉などの表現に走らないほうがいいのか。器用な子は、身体の細部まで表現してしまい動きがぎこちなくなってしまう。身体の細部にとらわれない子は、大まかでのびやかな動きになったようだ。
- ・鼻をつける位置で顔の向きや動きが決まること、手のひらは腕よりも薄く付けることなどは、五年生で指導してきたことである。
- ・どこから粘土を付けるかは指示しなかった。子どもの選択に任せるべきことであると思う。
- ・下描きはメモ程度にイメージを描かせた。

(2) 質問および話し合い

- ・ 芯材はどんなものか？ …… 盆栽用の針金（アルミニウム線 8m300円）を使った子どもでも楽に曲げたり切ったりできる。
- ・ 粘土がつきやすくて扱い …… 粘土のなかに木工用ボンドを入れて一時間ほど練っ
やすそうだったが、どん たものを使っている。
な工夫があるのか？

（ボンド入りの紙粘土について）

紙粘土 3 : 1 ボンドの割合で混ぜる。粘着力が増し乾いてもボロボロにならないので芯材からはがれることがない。着色もできる。

- ・ 4年生でも芯材を使わせ …… 4年生ではあまり芯を使わず、足が太くなくても立
るのか？ たせる工夫をさせた方がいい。
- ・ 土台の板は？ …… 廃材をもらってきて利用した。
- ・ 子どもの表情、しぐさなどで、一生懸命さを見取ることができた。
- ・ 子どもに静かに話かけている教師のかかわり方が参考になった。
- ・ 子どもの想いを表現しやすい芯材・粘土の工夫であり、参考になった。
- ・ 「組体操」という題材がよかった。
- ・ 素材の吟味が子どもの表現をたすけ、意欲を盛り上げていた。
- ・ 5年生から今までの長い教材研究であったと思われる。長い目で見て子どもを育てることの大切さを知った。
- ・ 自分の体験が動きにあらわれていた。
- ・ ポイントを押さえ、意欲を高めるように指導されていた。また子どもたちが見通しをもって取り組んでいるので、落ちこぼれがなかった。

2. 提言について

(1) 提言1……小柳 雄嗣 (桑園小学校)

『1年生の粘土学習』

・子どもたちが、のびのびと楽しみながら粘土に親しめるようにできるだけ大量の土粘土を用意し、身体全体を使った活動を保障するように努めた。粘土を通しての活動は、土粘土の持つ可塑性を体でわかり、のぼす・ちぎる・まるめる・つける・かくなどの技法を自然に身につけさせることをねらいとした。また子どもたちがごく自然に粘土遊びに熱中できる題材を工夫し、遊びにのめり込む中で、作るおもしろさや、楽しさを体験させ、造形する意欲づくりに努めた。

- ①「おべんとうをつくろう」-粘土と木の実・枝・ビーズ等を使い、ごちそうのいっぱい入ったお弁当を楽しみながら作り、まるめるつなぐなどの基本的操作を身に付けさせた。
- ②「たからさがしゲーム」-約1000kgの粘土を使い、グループ対抗の「たから探しゲーム」を通して、粘土に親しみ、手先だけでなく全身を使って楽しく遊ぶ中で、粘土の特質（量感・質感や可塑性）を知り基本的な技法になれる。
- ③「トムくんのおしろをつくろう」-大切に育てているハムスター（と自分）が楽しく遊べるようなお城を考え、自分たちの小世界を粘土で作ることにより、子どもたちに作る楽しさを味わせると同時に、粘土という素材の特質を知り活用する。また、身近材を活用することにより、多くの素材を体験し、作る喜びを感じさせ造形意欲を育てた。

(2) 提言2……池田 悦子 (山の手南小学校)

『どうぶつのサーカス』

・サーカスのトムおじさん（先生）との交流を通して〈絵→つくりたいものをつくる→立体〉とシリーズのなかで粘土を扱った。

第1次「サーカスがやってきた」絵画（4）

お話をきいて、想像したことを画面いっぱいに表示する。

第2次「サーカスカいじょうを作ろう」工作（3）

サーカス会場にあった色や模様をグループで相談しながら、段ボール・箱・紙を使って、サーカスで使う道具を作る。

第3次「どうぶつのサーカス」

粘土をひねりだす・つまみだすなどして、立体の感じを表現するサーカス会場で遊びながら、自分や友達の作品のよさを見つける。トムおじさんに、手紙と作品を送る。

・粘土学習は、粘土スケッチをくりかえし行なった。（首飾り・ちぎって積み上げなど）

- ・〈たまごのかたち〉から形をだしていくことも継続して行なった。土粘土は乾くと直せないことや、感触・においに抵抗感をもつ子ども数名いた。
〈VTRを見ながら〉
- ・トムおじさんからの手紙（サーカスの人が芸を教えるために動物を作ってほしい。）を読み意欲づけを行なった。第2次で作った会場に作った動物を連れていった。子どもたちは、会場や道具にあわせて、自由につくりかえていた。（火の輪をくぐれなかったぞうをひもで切ってスマートにするなど）
- ・シリーズ化の中で〈粘土学習〉を扱うことにより、単発の題材で行なうよりも、より強く子どもたちの意欲を引き出すことができた。

(3) 話し合いから

- ・ 1000kgの粘土はどのよ……数年前700kgを1・2・3年合同で購入し、以後、うにして用意したのか？ 新1年からひとり100円ずつ徴収して買い足していった。低学年が2週間図工室を借りきって粘土の造形遊びをしている。油粘土は使用していない。
- ・ サーカスや動物を1年生……レーザーディスクでサーカスの様子を見ている。にどのように意識づけたか？ 遠足で円山動物園にもいっている。
- ・ 遊びを通した粘土学習が非常に大切なことがよくわかった。大量に粘土を準備することもこれからの粘土学習では必要なことなのであろう。
- ・ 生きもの（ハムスター）をうまく教材に生かしたよい例であった。
- ・ どちらの提言も、場づくりが、こどもの生き生きとした活動を引き出していた。
- ・ 工作と粘土学習がお互いに発想を広げあっていた。特に低学年では有効だと思う。
- ・ 自分たちと違うもの（サーカスのおじさん、ハムスター）と交流を持ちながらの取り組みは楽しいヒントであった。

助言者から

意欲をつなげていく実践がすばらしい。領域を限定しないで取り組んでいくことは、特に低学年では大切である。低学年での豊かな経験が次の学年で生きていくものと思う。二人のVTRでの提言をみると、生き生きとした活動の中で、子どもたちが学んでいっている様子がよくわかった。

第7分科会記録

分科会テーマ

『一人ひとりの表現活動にむすびつた鑑賞学習』

授業者	札幌市立三角山小学校	菅原清貴
	題材名 『新考える人…わたしもロダン』 5年生	
提言者	札幌市立石山南小学校	板田恭侑
	札幌市立福井野小学校	村田力
助言者	森町立石倉小学校	石井久
	札幌市立東光小学校	伊藤英世
司会者	教育大附属釧路小学校	中村彰
	札幌市立東苗穂小学校	伊藤暢紀
記録者	札幌市立太平南小学校	山本景子
	札幌市立手稲中央小学校	和田恵子
運営委員	札幌市立手稲北小学校	仁木隆



1. 授業について

(1) 授業者から

・授業づくり（日常の実践）

主題を設定し、題材のどの辺に鑑賞の部分挿入するかを考えている。鑑賞学習と造形トレーニングを組み入れた題材構成となっている。製作活動と鑑賞活動を相互に行うことが、連続した意欲を引き出すことになると思う。

・本時について

ロダンの「考える人」の像を見せて、何をしているところかを発表させるところ

からスタート……感想の内容は、鑑賞の目的からは程遠いものだったが、心材を組み立てたころから興味が出てきた。美術館に行って作品が何を語りかけているのか、また、作品づくりの参考になるポイントを見つけてこよう……

・美術館へ

身近に美術館があっても2名程しか行ったことがなく、今回の経験をもとに足をほこぶ子が増えてくれればと思っている。(飽きもせずよく見ていた)

(2) 話し合いから

*参加者から(自己紹介を兼ねて)

- ・鑑賞には恵まれた環境、北欧では作品に触れることができる。日本も一考を要する。
- ・ユニークな授業設定だ。
- ・人間の持っている表現することの素晴らしさを育てる鑑賞学習について共に学ぶつもりで参加。
- ・鑑賞は何のためにするのかということについて聞きたくて参加。

(3) 子どもの様子

・鑑賞は新しい分野

入館の前に一人一人のめあてを確かめた。“立体は後ろもあるよ”“作品からどんなさけび声が聞こえてくる?”の二つの鑑賞のポイントを与えて、自由に作品との会話をさせた。

子どもと作品の間に入って、鑑賞のなかだちをしていた。作品との出会いで大きな感動が得られたと思う。ほのぼのとした授業だった。

- ・図工科が本当に子どもの側に立った授業になっているか?本物を見せることはひとつの圧迫感がある。作品を前にして一人一人の目がキラキラ輝いていた。友達同士でも自分の目でみたことを率直に言い合っていた。ここに鑑賞の目的があるのではないか。

本物を目の前にしてかなしばりに合ったような感動…触れることのできる場の設定は大切。随所で先生の助言が生きていた。勝手に見せるのではなく一体となって見る。

- ・彫刻を見ることをはじめとして、学校の近くに館があるという環境。また、それを授業に生かすという取り組み。触れさせてくれるという開かれた点もよい。

(4) 鑑賞活動について(授業者から)

- ・製作活動に伴った鑑賞活動として、鑑賞を位置付けている。5年生ぐらいだと、稚拙なことばでしか表現できないので、鑑賞だけの授業は意欲的でない。製作する中で生かせる鑑賞活動を組み入れている。

(5) 日常実践について

- ・ 子どもの見方、リフレッシュタイムの鑑賞と教師が意図的にさせる鑑賞とがある。
- ・ 以前から鑑賞領域はあった。大人と子どもの見方は違う。大人が分析する見方と子どもが知的にとらえる目とは違う。子どもが触ることによって感覚的に感じるものはすごいと思う。大人が通り過ぎる絵でも、子どもは感じて立ち止まる。
- ・ 導入の段階で、他のクラスの作品を持ってきて見せる。これも鑑賞と言える。今日のような彫刻を見せることは、作品づくりに生かせるのかな？大きすぎてどうなのかな？と思うが……。
- ・ 本来鑑賞というのはレベルの高い作品を通して行うのではなく生活の中にあるものをじぶんの暮らしの中に引き寄せて考えていく機会にすべきだ。日常的な茶碗ひとつとっても鑑賞になる。初めは感覚的なもの……次に知的なものへ……感性に引き寄せる……知性と結び付いている。回りから見なさいと言うのは大人の見方。子どもは、ここから見た方がおもしろいと自由に視点を選ぶ。

つくり出した人間の偉大さ、作品を通した人間と言うものを考えなさい。文化を大事にするかという造形的モラルをつくりなさい。人間の生活の中で造形をやるときのひとつ。きっかけとなるような学習を与えなさい。……これをやらなければ単なる美術鑑賞になってしまう。美術を通して、人間の生活を見ていくような鑑賞を。

- ・ 作品をつくりやすくするための鑑賞が多かった。今回は本物に触れさせてみせたところが素晴らしい。自由に鑑賞させるのがよい。今日の指導の前後をとっばらっても素晴らしい本時の授業だった。

(6) まとめ

- ・ きめの細かい指導……本まで調べ、エピソードまで話して聞かせたことが大きな力となる。手作りのスケッチブックひとつとっても日頃の指導のきめ細かさが伺える。鑑賞だけの授業だけでもよかったのではないか。
- ・ テラコッタの作品と自分たちの立像とに違和感があったのでは？作品から内面をつかむのは難しかったのでは？その点で教師と児童に断層があったかな？背中がせまい、目が細いという感想から、子どもはよいところをついているなと思ったが、鑑賞とは、教師が感動しなければどうかなと思った。鑑賞は難しいものだ。

2. 提言について

(1) 提言1……村田 力（福井野小学校）

- ・ 福井野小学校の恵まれた環境を生かして、多領域への働きかけを（小動物などを）かってみたい、つかまえてみたい。自分の思いを表現したり、語りかけたりする図工の授業、物探し……何をどうするのかを考えて絵をかく……自分一人ではな

く友達同士話し合えるような内容に表現。心の勉強になればと思い作品に取り組んだ。一人一人の思いを表出させて、語りかけていく授業をめざしている。

(2) 提言 2……板田 恭侑 (石山南小学校)

- ・ 科学技術においても経済力においても、世界の最先端に行く日本は、今や文化において物真似ばかりしては行き詰まる。個性や創造性を培うことがますます大切になってくる。(スライド)

全5時間のうち、一学期は3時間指導、あと2時間には何をどういうタイミングで入れていくか考えている。人間性にも触れながら鑑賞を組んでいきたい。

(3) 話し合いから

- ・ 子どもがつくった作品が学校生活に生かされていく、その力が後々まで発揮される。図工の時間に培われた力が日常的に生かされていないのが現状。その生かし方と鑑賞の相乗効果を工夫することが大切である。

江戸以前にあった日本人の色彩感覚が石油文明と共にどんな色でも溢れるようになってきている。日本は情報伝達の趣が強く、ヨーロッパでは素材を生かした表示が多い。大きく都市づくりの観点からも鑑賞の領域と関わりがあると思う。

- ・ 名画鑑賞で下手な絵と発表している。言葉のうらにも下手な絵という意識はあるのか。比べる絵ではないのに比べているので鑑賞の上での危険ではないか。距離をおいて鑑賞させるべきでは？

見えないものは見えない、見えるようにするのが鑑賞。見え方は個々の美意識の水準にもよる。体験的な造形経験でなければならない。製作があって鑑賞の目が育つ。その色を使ったらその色がよいとか、好きと言えらると思う。

作品は善い悪いではなく、自分と違うところはどこかというところを発見させることが鑑賞の態度につながると思う。

(4) まとめ

- ・ 一人一人の子どもの思いを大切にすることが求められる。今までの鑑賞の反省をもとに、今後は子どもの内面を育てる鑑賞の在り方の研究を深める必要がある。

第8分科会記録

分科会テーマ

『つくる喜びがあふれる学習』

授業者	札幌市立伏見小学校	今裕子
	題材名 『不思議の国の子ども達』	3年生
提言者	札幌市立澄川小学校	濱野りな
	札幌市立幌西小学校	桜田豊
助言者	乙部町立富岡小学校	中川真一郎
	札幌市立澄川西小学校	谷勲
司会者	札幌市立幌南小学校	板木武
	留萌市立幌糠小学校	竹内堅治
記録者	札幌市立大谷地東小学校	佐藤真弓
	札幌市立篠路小学校	田中佐知江
運営委員	札幌市立東橋小学校	伊藤正敏



1. 授業について

(1) 授業者から

・授業づくり

長い目で子ども達を育てていきたい。それで「不思議の国の子どもたち」という題材で取り組んできた。森のかくれんぼう（お話の絵）……動く招待状……おしゃべりハンガー……へんな色の国（まほう使いのふく）……まほう使いのかぶりもの（本題材）という題材群である。

3年生は、自由に生き生きとした空想の世界にひたることができる。

素材との楽しい出会いが活動のきっかけとなり、空想や想像の世界で遊び、思いのままに表現できると考える。

この一連の題材を通して、素材の持つ面白さに気づき、生かすことによって、つくる楽しさにひたることができると考えた。

(実践した授業風景をVTRで発表があった)

(2) 話し合いから

*参加者から(自己紹介をかねて)

- ・子ども一人一人が一生懸命取り組んでいてすばらしい。
- ・ひとつのテーマで題材が流れているのがおもしろい。
- ・ひとつのテーマで流れていくということが子どもの意欲をかきたてる。
ぼうしひとつでも広がりがあり、いろいろな種類ができていた。どうしたら子どもの思いが広がっていくのかなと思いながら見ていた。
- ・2年生ぐらいまでは積み上げるものがないが、3年生ぐらいから関連した授業が成り立つ。時期をきちっとねらってやっていて良い。
- ・いろいろな材料を使って工夫してつくっていた。いままでいろんな造形体験をしてきたのだと思う。

(3) 日常実践について(参加者からの質問に関連して)

- ・子どもたちの中に「友達のアイデアをぬすんでいいんだ」という雰囲気をつくった。(自由に交流)
ぬすんだ人は、もっと工夫して、ぬすまれた人は、さらにがんばってということをお話している。
- ・つくりっぱなしではなく、コマーシャルタイムのような発表の場をつくり、たたえ合っている。
- ・図工の時間は、「だめ」ということを言わないようにしてきた。
- ・図工カードでアイデアを交流している。
- ・意図的にロングの題材の前にショート of 題材をやり、素材提供をたくさんやることによって、素材に少しずつ目を向けさせ、経験をさせていく。
そうすることによって、子どもが材料を選択したり、材料から発想したりする等の活動が活発になる。
- ・3年生でこれだけの素材経験ができていくということはすばらしい。2年生までの先行経験のイメージも積み重なってきている。

(4) まとめ

- ・図工の時間が変わりつつあると思っているが、今日は、それを強く感じた。教師の手をはなれて一人一人が作品に向かっていくように育てていくことが大事である。

- ・ 図工の時間を子ども一人一人にかえしていくことがこれから大切にしていかなければならない。
- ・ 授業は、学級経営と大きく関わっている。材料や素材との対話などにも現れてくる。
- ・ 本時は、子どもが思いをかなえるためにじっくり取り組み、深まっていく様子が見られた。自分の思いをあたためている、そんな時間が大事である。子どもが勝手にやっているように見える活動にも、生き生きと創作しているということを、個性なども含めて、認めていくことが大切。
- ・ 子どもの思いがあふれる教材化のあり方ということだが、ひとつの物語からいろいろなものに広がっていくことが良く考えられていると思った。

2. 提言について

(1) 提言1……濱野 りな（澄川小学校）

（作品提案・マジカルタワー）

- ・ 図工嫌いな子がいるので、図工は楽しいなと思うように取り組んできた。マジカルタワーは、何層かになっていくゲーム盤で、3つの異なった世界があるものということで提示した。
- ・ できばえのきれいさよりは、遊んでみたくなるゲーム盤をつくれたので、子ども達は満足していた。

(2) 提言2……桜田 豊（幌西小学校）

（VTR提案・立体迷路）

- ・ ダンボールや空き容器などを使って、ビー玉がころがって落ちていく迷路を作った。
材料を組み合わせながら思いを巡らせたり、試したり、友達同士で話し合いながら作る子どもの姿が見られた。
つくるという過程を子どもの思いに、より一層ゆだねたものにしていきたい。

(3) 話し合いから

- ・ 遊ぶものを作るということで、材料を生かしていくむずかしさがあると思う。やっていきながら、困ったり、悩んだりして次へつなげていくということがある。そうしてイメージがはっきりしていく。
- ・ こわれたりして困ったという子どもがいたということだが、こわれて困るということがいいのだと思う。しくじりのない授業より、しくじりのある方がいい。その時初めてしっかり付く付き方などを真剣に考えるようになる。前もって話しておくことも必要なこともあるが、1回や2回聞いただけではわからない。うんと困る

経験をさせた方がいい。教師も一緒に悩むことも大切なことだ。

- ・教えるものと発想させるものと、区別して授業を構築していくことが大切ではないか。
- ・今後の授業づくりで考えていかなければならないことは、
子どもの思いがかなえられる教材を
失敗を恐れない、失敗をのりきられるような教材を
技能差が、あまりあられない教材を
どの学年でも、こんなことができた段階をおってわかるようにする
教師は、指導から援助へ（言葉で、教材で）
教科そのものが、基礎基本と考えたい。
- ・つくる喜びがあふれる学習というのは、教師が子どものつくる喜びをあふれさせる授業をするということ。
- ・「つくりたいものをつくる」というのは、つくりたいものを、勝手につくらせるものではなく、つくりたいものをつくれるような授業をすること。
- ・一人一人を大事にして、個性を伸ばしていく教育をすること。
「これは、ぼくのものだよ。」（その子の存在を認める）「これは、ぼくしかできないよ。」（その子の個性を認める）
- ・子ども主体の授業をしていきたい。



第9分科会記録

分科会テーマ

『つくる喜びが生きる学習』

授業者	札幌市立桑園小学校	植木 則子
	題材名「ひらけゴマ!」	5年生
提言者	札幌市立小野幌小学校	土肥 宏充
	札幌市立稲穂小学校	白井 真澄
助言者	赤平市立平岸中学校	渡部 稔
	札幌市立新陵小学校	鶴賀 孝三
司会者	芽室町立芽室小学校	出村 英和
	札幌市立幌南小学校	西 寛
記録者	札幌市立共栄小学校	木戸 久美子
	札幌市立南の沢小学校	山室 ゆかり
運営委員	札幌市立真駒内南小学校	大村 憲一



1. 授業について

(1) 授業者から

・授業づくり（指導の手順を説明）

*はじめに、物語「アリババと40人の盗賊」を読み聞かせる。

*テーマは、ひらけゴマ。何かをすることによって、見えてくるものをつくろう
ということを知らせる。

*参考作品をみせる（教師製作）。盗賊の袋が開くもの、かめから盗賊が出てくる
ものなどを見せる。

- * アイディアスケッチ……能力に合わせて調整、必然性を大事にさせた。構想、手順を考えさせる。
- * 試作させる。画用紙でおおざっぱに。
- * (本時) じょうぶさ、色合い、ていねいさ、しかけのスムーズさ、用具の使い方、安全性などを指導した。

春から”手は第2の頭脳である”ということで、5分くらいでできる工作を20ぐらい作らせてきた。

一人一人対話して進めることができた。

(2) 話し合いから

- ・ 子どもがよく知っている物語で、興味を持って取り組んでいた。
- ・ 子どものアイディアが先生を越えていた。普段の指導がうかがえた。
- ・ はさみや接着剤の使い方になれていて驚いた。
- ・ 一人一人の作品のストーリーが違っていておもしろく、また、確かな手作業だった。
- ・ なかなかイメージが広がらないで困るが、お話の中からテーマをみつけて発想のきっかけを作っていた。
- ・ 子どものかいている絵がしっかりしていた。
- ・ すばらしい作品を生み出す秘密は？
 - * 教師が作った作品を見せるようにしている。そして、遊んでいる。子どもは“いつつくるの？”とすぐ興味を持つ。または、半分作っておいて、知らないふり。子どもは“何に使うの？”と意欲を持つ。すると意欲的に材料集めをするようになる。こちらからやろうとは言わない。
 - * 授業では、はじめにしかけの見本を見せるだけ。そこが大切で、さわらせると収束がつかなくなる。
- ・ 子どもとともに作ったり、興味を持つ環境づくりが大切。
- ・ 作る喜びを子どもは持っていた。作品もすばらしい。
- ・ 子どもに教える部分と気づかせる部分がある。しくみはきちんと教える部分だと思う。また、技能も4月から継続して指導してきたようで、きちんとできていた。
- ・ 一人一人と関わったということで、アイディアあふれる作品が多かったし、能力差に応じた作品になっていた。
- ・ 「あっ！わかった」「こうやればよくなりそうだ」など発見することが大切である。
- ・ もとになるしくみを、見せるべきか、見せないべきかは教師の題材観の持ち方と、児童の実態による。この題材で何をどうするのか、子どもにどんな能力をつけるのか、はっきりさせておくことが大切。
- ・ しかけをつくり、試作を作ってみて、うまくいったり、失敗したりとか、子どもが困った時の教師の役割とか、そんな場面が授業の中で見られるようになればよいと思う。

- ・ もっと素朴なもの、子どもの幼さが出てきてもよい。

(3) まとめ

- ・ 学級経営がうまくいっていないと、授業もうまくいかない。学級経営、学習する雰囲気大切である。
- ・ 子ども一人一人との関わりをしっかりと持っている。能力に合わせた指導をしている。教師の役割がとても難しいが大切なところ。
- ・ しかけが5つで選択できる。試すことができる。試しながら発見があり、つくりたいものが、変わったり、はっきりしたりする。
- ・ 子どもの思いに沿った学習展開を工夫していく。
- ・ 題材の工夫によって、子どもの意欲はすごく違ってくる。

2. 提言について

(1) 提言1……土肥 宏充 (小野幌小学校)

- ・ 題材「ぼく、わたしのトロフィーをつくるぞ」(VTR、作品で発表)
 - * 集会で賞状の他に、トロフィーがあってはどうかということで始めた。
 - * 材料は、木、空き缶、ダンボール、発泡スチロール、など
 - * 最後は、金、銀のスプレーで着色したり、アルミホイルをかぶせたり、リボンをつけて完成。
- ・ あまり概念にとらわれないように、つくった“オブジェ”を結果としてトロフィーにした。
- ・ 題材「服を作ろう」
 - * はりがねのハンガーに、画用紙をつけて服を作る。
- ・ 題材「アンデルセンあみ」
 - * ちらしをストロー状にまいて、空き缶にまいていく。伝統工芸的なもの。
- ・ 図工は、楽しくあるべき。集中できる、ないところから生み出す、発想を生み出す、手作業の力をつける、完成後に使って遊べるなど楽しさのある授業を組み立てていこうとしている。そして、できるようになった、満足したということことは、子どもの思いが生きることだと思う。

(2) 提言2……白井 真澄 (稲穂小学校)

- ・ 題材「パックンの大変身」(作品発表)
 - * 材料ボックス……カップラーメン、プリンカップ、納豆のカップなどのあき容器を集める。色や形を感じとる心を育てる。
 - * あき容器を使って材料を生き返らせよう。
 - * 材料からイメージをふくらませる。

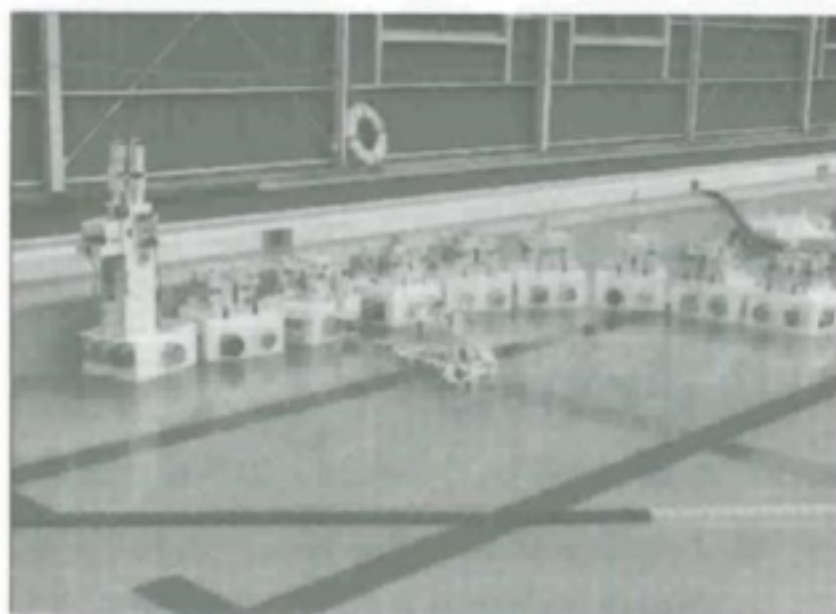
* 作戦カードで構想を練る。

* ウォッチングタイムで他の人の作品を見回る中で、完成への見通しや新たな発想を持たせる場をつくる。

- ・ 今まで技術を重んじ、子どもの思いをそまっにしてきた。子どもの思いを大切にしていきたい。そのための題材開発、教師の役割など今後の課題。

(3) 話し合いから

- ・ 材料から発想する場合と目的があって材料を選ぶ場合がある。
- ・ 接着剤はいろいろ様々あるが、教師が材料用具に対する教材研究（子どもの要求を満たしてやるために）が大事である。
- ・ つくる過程からその子らしさがでてくる。アイディアスケッチする子、つくりながらイメージをふくらませる子など、完成までの道筋の中にもその子らしさ（個性）が現れる。
- ・ 想像力を働かせる、手を働かせるということの意味を今後考えながら実践を積み重ねていかなければならない。



第10分科会記録

分科会テーマ

『一人ひとりの心が拓く絵画指導のあり方』

授業者	札幌市立美香保中学校	八重樫 真 一
	題材名 『もう一人の自分』	中2年
提言者	札幌市立新琴似北中学校	富 田 賢 司
	札幌市立平岡中学校	向 敏 光
助言者	釧路市立美原中学校	稲 船 正 男
	札幌市立札幌中学校	新 谷 純 鋪
司会者	苫小牧市立沼ノ端中学校	佐 藤 公 毅
	札幌市立札幌北中学校	小 幡 哲 也
記録者	札幌市立東栄中学校	六本木 祐 司
	札幌市立あやめ野中学校	西 山 昇
運営委員	札幌市立丘珠中学校	田 中 潤



1. 授業について

(1) 授業者から

地域・生徒については、美香保中は約600名。新しい人と古い人が混在している。甘え・してもらう・指示待ちの生徒が多い。

題材設定の理由として、自画像を通して自我のつぶれがちを伸ばしてやりたい。

指導過程での工夫として、前年まで比例を正しく、定規をつかってやっていたが、3分の2の生徒はつらく感じたので、これではだめだと考えた。

問題の提起として、次に別の課題をやるときに、自分の教えた中から生徒が自分を

拓いていけるように、そういう機会でありたい。

現代絵画は記録性や情報の伝達が剥奪されているが、原点にもどらざるをえない。

(2) 授業についての質疑

質問者 A 「いろいろな材料を使い、表現の多様性があるが、どのくらいの範囲で考えていくのか。心の表し方・構図等で中学2年にどれくらいの条件を与えるのか。」

授業者 「自分の気持ちにあっているのはどれかということが大切である。描画材料はデッサン・クロッキーで個々に経験しているが、組み合わせは初めてである。鉛筆ではできない影が、木炭コンテでかなりかき込みができた。深い指導をしていないので、生の使い方をしていたが、いままでに出会ったことのない材料に出会って可能性を拡げることができた。」

質問者 B 「鏡を使うと表情の出し方に難しさはないか。また量感や立体感の指導はどのようにしたらよいか。」

授業者 「複雑な要素もあるが、量感についての指導など技術面よりは情意面の指導から入っている。クロッキーなど基礎的なことについてはやっている。」

質問者 B 「主題を文章化させることについてどのようにとらえるか。」

授業者 「自分の願いなどをまとめたり、違う角度からとらえてみるための文章化であり、絵に向かう手段の一つとしておさえている。」

質問者 C 「二枚の鏡を使った理由は、また評価のことについては」

授業者 「一枚だと目線が一定になってしまう。評価については、基本的な技能について見ていくと同時に、教師の作品を見取る力が大切である。」

2. 提言について

(1) 提言1……富田 賢司（新琴似北中学校）

○感覚←←←経験の積み重ね←←←意欲

○意欲を高めるためには課題が山積

○学習に対する抵抗感を除くためには、
・個性に応じた指導の幅
・条件の設定
・材料体験、取り扱い方

○新川西中学校、森長先生の「模写」の実践紹介

○新琴似北中学校、富田先生の「心の世界」の実践紹介

(2) 提言2……向 敏光（平岡中学校）

○豊平区の研究仮説 ①造形力の高まり→学習意欲

②個性の把握→造形力

- 向先生の指導事例「一版多色 家族」の紹介
- 造形能力・主題の工夫・教材開発に向かって
- 長島先生の指導事例「自画像」の紹介
 - ・小学生は中学生よりのびのびしている。
 - ・小学校高学年から写実的な見方が強まる。
 - ・自画像について指導事例の紹介

(3) 話し合いから

- 一人一人を継続的に見ることに限界があるのではないか。たくさんの資料
 - ・技法の中から選択させることはどのように個性化につながるだろうか。
- 教師は生徒のつまづいているレベルを判断しなければならない。3年間で総合的に力がついていくのではないか。
- 中学校の美術科でなければ伸ばせられないのはどんなことか。生徒の実態を考慮しながら、教師も偏りがないように研修を深めなければならないが。
- 版画の下絵に写真を使ったかどうか。写真の限界もあるが。
- 彫刻やデザインの授業で写真を使ったことがあるが、使い方によっては有効である。

3. 講評

- ・授業の感想としては、生徒は短い時間で打ち込んでいたし、先生も燃えていた。時間・場所・物の限界は必ずあるので、その中でよりベターというふうに考えなければ先生が疲れてしまう。指導の工夫ということでは、生徒は作品をつくりながら、ほんとうに不安を感じているだろうか。先生は生徒を助けようとしながらかえって自分の思いの中に生徒を入れてしまっているのではないか。追い込み方の範囲を考える必要がある。札幌は美術の専門性・教科性の確立を試みている。
- ・昭和40年代の札教研でも個性化はあったし、今迄何度も繰り返されたテーマである。美術科が個性教育を担うという気がする。高校入試に関わる美術科の評価の問題がある。現在の絶対評価を加味した絶対評価は、将来は絶対評価に変わるだろう。個性を認めて生かすということは、自己実現ということ、それは自分の主題を完成させたいという欲求を充たすことである。

第11分科会記録

分科会テーマ

『一人ひとりの心が拓くデザイン・工芸指導のあり方』

授業者	札幌市立上野幌中学校	伊藤尚
題材名	『小学生へのメッセージ』	中2年
提言者	札幌市立啓明中学校	高杉正和
	札幌市立南が丘中学校	阿部時彦
助言者	函館市立大川中学校	田邊康夫
	札幌市立藤野中学校	平山満
司会者	留辺薬町立温根湯中学校	長谷川政司
	札幌市立山鼻中学校	小野泰裕
記録者	札幌市立向陵中学校	木原英俊
	札幌市立青葉中学校	菅原尚俊
運営委員	札幌市立厚別中学校	岩間歳仁



1. 授業について

(1) 授業者から

- ・一番子どもが喜ぶ部分を授業にもってきた。人に見てもらう方が子どもには喜びがあるのではないだろうか。大きなものをつくらせ、グループごとに制作することにより、リーダーシップをとる子どもを選び、装飾活動でのディレクターの概念を取り込んだ。カッティングシートを使用することにより、ステンドグラス的な効果をねらった。

(2) 話し合いから

- ・ 抽象形をつかった授業は難しいが、それをグループ学習で行ない興味を持てるようにしたのは面白い。広い場所でのびのび制作しており、小学生にもできるかもしれない。
- ・ グループごとに取り組むことによって、個人で制作するよりも、楽しそうであり、完成の喜びも大きい。ピースの形が三角形だけでなく、いろいろな形があった方がおもしろいのではないだろうか。
- ・ 本時についての評価は難しい面もあるが、グループとしての評価のポイントをあたえるとかチェックカードを使う方法もあるのではないだろうか。人間的な成長過程も評価の観点として必要ではないだろうか。
- ・ 小中共同で制作することも可能ではないだろうか。
- ・ 発想の段階では、考える道すじを教師から与えてやる方法もあるのではないだろうか。

2. 提言について

(1) 提言1……高杉 正和（啓明中学校）

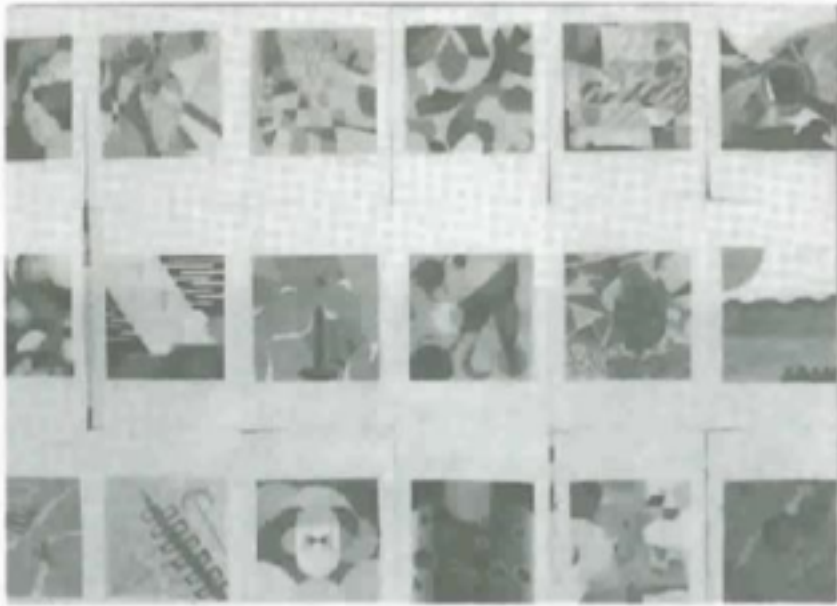
- 生徒に質の高い制作をさせることは大変なことだが、基礎・基本をおさえ、個性化個別化を図ることによって、生徒自らの感性や造形意欲を高めることができる。
- 教師は効率よく子供たちが時間をむだにしないで失敗しないで出来るかを考えがちだが、自主性は失敗を体験させなければ生れない。押しつけずに気付かせ自主性を育てたい。
- 宮の森中…辻岡先生
 - ・ 「たまごをつくる」ではいままで美術がイヤな生徒も生き生きと取り組んでいる。
- 向陵中…木原先生
 - ・ 「ペン立て」ではアイデア・みがき・彫刻などの中から力を入れるところを生徒自身が決めて計画表を作成させている。

(2) 提言2……阿部 時彦（南が丘中学校）

- 「一人ひとりの個性を把握し指導に生かすことにより生徒の意欲は高まる」との研究仮説からの実践をする。
- 子供の意欲を引き出す導入が大切である。
- 一度切られた木が作品として生き返るなど、ビデオを使い制作過程を見せて子どもの目を引いた。
- 厚別中…白崎先生
 - ・ 「自然物からの構成」は発問を中心に授業を組み立てた。
- 基礎基本を大切に発達段階に応じたレベルを期待することである。

3. 講 評

- ・ 小学生からしてみれば、自分たちのことを考えていてくれるよい先輩がいるという、生徒指導としての効果が今日の授業にはあったのではないだろうか。
- ・ 評価については、グループの点がその子の評定に重大な意味を持たないようにしなければならない。
- ・ たまごは「見て、ふれて……」という意味からよい題材ではないだろうか。
- ・ 共同制作は小学生もよろこぶ題材ではないだろうか。
- ・ 卵はほかの材料でもできる可能性があるのではないだろうか。
- ・ アイデアを出すためには、始めに教材を教えた方がよいのではないだろうか。



第12分科会記録

分科会テーマ

『一人ひとりの心が拓く彫刻・鑑賞指導のあり方』

授業者	札幌市立八軒中学校	中山 龍 雄
	題材名 『彫刻鑑賞（彫刻美術館を訪ねて）』	中2年
提言者	札幌市立日章中学校	中尾 孝 典
	札幌市立稲積中学校	池 嶋 憲 彦
助言者	旭川市立六合中学校	千葉 豊 治
	札幌市立新川中学校	東 志 隆
司会者	羅臼町立羅臼中学校	山口 長 伸
	札幌市立陵北中学校	小 泉 信 嗣
記録者	札幌市立白石中学校	後 藤 和 司
運営委員	札幌市立発寒中学校	合 田 典 史



1. 授業について

(1) 授業者から

彫刻をじかに鑑賞し、触れ、味わうことができる。開校30周年の記念制作の予定があり、興味関心を高めたいねらいがあり題材を設定した。本時のねらいで特に力を入れたのは、“氷雪の門”などの作品はどんな動作なのか、また、何を表現しているかを深く考え、追求し本郷新氏の願いを理解するというところである。この内容については事前に学校での授業でふれているが、本日の授業については、生徒も教師もリラックスしていた。

(2) 話し合いから

- ・このためにわざわざ稚内まで行ってビデオにしてくる熱意はすばらしい。
- ・かなりレベルの高い作品を見せているが、生徒は理解力があり、よく発言する表現力は、どのようにしているのか知りたい。
- ・自己評価などでは必ず発言させるようにしている。
- ・授業に入る前に周到に準備し、また教師自身が感動して臨んでいるので、ひじょうに迫力のある授業になっている。現地へ行って見なければ分からないものである。
- ・子どもが行って見たいという気持ちになる事前の取り組みがすばらしい。教材にどれだけ深く関わりを持つか、教師の熱意にたよるところが大きい。
- ・彫刻にじかに触れて重さなどを体験できたことは貴重である。
- ・鑑賞教材の扱いは、大きな課題である。本物な多くふれさせることは、将来にわたって美術を愛好することにつながる。

2. 提言について

(1) 提言1……中尾 孝典（日章中学校）

- *白石地区の研究の概要について
- *4年間の授業研究の流れについて
- *指導者の個性とオリジナル教材について
- *実践より
 - ・白石地区の彫刻教材の実践について
 - ・「表情のある」の実践は、心棒をつくるのに時間がかかるが、デッサンをしっかりさせた。
- *生徒のもっている気持ちを表現に最大限に生かせるようにする私達に準備が大切である。
- *身の回りには彫刻はあまりないが、できるだけ多く触れさせてあげたい。

(2) 提言2……池嶋 憲彦（稲積中学校）

- *西地区の研究の概要について
- *すじ道のわかる授業の実践について
- *工芸教材（陶芸、寄せ木など）について
- *一人一人の心が拓く造形活動について
- *目標構造（認知・技能・情意）について
- *単色版画、ステンシルについて
- *表現と鑑賞は、離せるものではなく、一体なもので、くりかえし行われる。
- *校内の掲示活動の中で鑑賞も大切である。

* 模写（鑑賞）することでより作者の表現意図を理解する。

* 何を目的に子どもたちへ見せるか、与えるばかりの鑑賞でなく戻ってくるものでありたい。わかるというより味わわせることが大切である。

(3) 話し合いから

- ・ 自己評価・相互評価をとりいれた実践がある。
- ・ 手を部分に分けて考えさせ、後でバランスを大切に作る指導の方法がある。
- ・ 心材を使うことも使わないこともあるが、ねらいによって決めたらどうか。
- ・ 発達段階を考えた心材の使い方があっていいのではないか。
- ・ 造形要素的な面と感情表現がどう結びついているかは研究が不十分である。
- ・ 素材については人工粘土は使いやすいが暖かみに欠ける。モデリングとカービング両方やったがカービングは難しい。
- ・ 同じテーマでも素材の使い方・教師の考えで変わってくる。

3. 講 評

- ・ 安心してゆっくり授業を見ました。旭川も彫刻が多い町で以前の旭川大会で作品を見ながら授業をおこなったことがあるが、やはり実物を見ながらすすめていける授業実践は素晴らしい。また自作のビデオまで使うことには教師の生徒への熱意が感じられる。札教研の取り組みもよく、これだけ質の高い中味のある研究をしていることは大変だと思いますが素晴らしいものだ。新指導要領の扱いも考えなくてはいいませんが、よい作品を作るために造形的な要素を扱っていくのですがそれだけがねらいではない。情緒的な面も大切だろうと思う。
- ・ 授業については、作品よりも作者の人間像を知ることが大切で、今日の授業も、そこが見どころであった。限られた時間の中では難しいが、“哭”の作品については“氷雪の門”のビデオにつながり、作者の意図が子どもに分かる。時代背景を考えると、あまり結論を言わないほうがよかった。目標構造と評価の関係については、一人一人の子どもたちが自分の行動を確かめていくということが大切である。

鑑賞の場は、パネルなどにまとめて校内に掲示して、次の教材・次年度へと役立てていくということが、より機会を拡げることになる。美術教師はもっと外へ出ていかななくては。環境づくりがよい授業につながる。選択教科の理解ももっとひろめていかななくてはならない。

第13分科会記録

分科会テーマ

『生徒の意欲を喚起させる題材の研究』

提言者	札幌平岸高等学校	香西富士夫
助言者	札幌東陵高等学校	開沼英則
司会者	札幌北高等学校	土岐禎次
記録者	札幌南高等学校	小林智彦
運営委員	札幌稲雲高等学校	中田千年



1. 実践報告と話し合い

高等学校分科会では平岸高校の香西先生による提言に加えて、参加された真栄高校の佐野先生、滝川高校の沖田先生の授業実践報告がありました。

各々の先生方が各校の実状を考慮し工夫されている貴重な実践例より、提言として以下の内容でまとめました。

- ①各学年の第一単元にデッサン（鉛筆）を設け基礎的表現力を習熟させる一方、油彩・デザイン・版画の単元では生徒一人一人の個性を重視した表現活動を展開する。対象を客観的に観察し表現する力は、必要不可欠な基本的要素である。

- ② 1・2年生の必修芸術に対し3年生で選択科目として選んだ美術選択者の中に少数ではあるが単位修得のため止むお得えず美術を選択したものがいる。そのような生徒に対し授業への積極的な取り組みを喚起させることが非常に難しい。カリキュラムを編成するうえで充分検討しなければいけない課題である。
- ③ 講師或いは他教科との関係上、芸術の授業を5・6校時に設定しなければいけない状況があるが、教務的配慮がほしい。
- ④ 施設・設備の一層の充実に努めたい。特に教室のスペースを一般教室の2倍はほしく、工芸教室との機能的な関連性を持たせたい。
- ⑤ 制作意欲を喚起する指導の在り方として、一般的であるが、合評会や、完成作品を展示することが非常に効果的である。
- ⑥ イメージを柱として展開する単元では、導入段階で漠然としたテーマを与えるのではなく、ある程度表現領域を絞ることが必要である。例えば、エッチングの授業で置換法的表現より価値の転換をイメージしてゆく作品制作の場合、画面上に昆虫を入れる条件を与え、発想の手掛かりを生徒につかませる。生徒は図鑑や写真、標本を各自で用意し、昆虫と主題の関連性をイメージしてゆく。
- ⑦ 新学習指導要領に基づき、特にデザイン領域の授業において、構図や色彩計画の段階で、コンピューター機器を利用することにより、効果的学習ができる。購入予算、機種選択などさまざまな問題があるが、今後の検討事項として積極的な取り組みが必要である。
- ⑧ 小・中・高の連携を一層強化し、伸長度に合ったカリキュラムの在り方や、美術教育の探求が必要である。

以上3人の先生方の提言を要約したわけですが、生徒の個性をいかに生かすか、また創造性をどのように高めてゆくのか、私たち教師がどのような課題意識をもち、研鑽を積むべきか、参加された先生方の活発な意見が交わされ盛会のうちに終了した。

中学校全体分科会記録

分科会テーマ

『これからの美術教育－教育課程の実践的課題－』

提言者	札幌市立柏中学校	奥野郁男
	札幌市立清田中学校	武市尚政
司会者	札幌市立北栄中学校	村谷利一
記録者	札幌市立柏中学校	多田紘一
運営委員	札幌市立陵北中学校	角力山 旭

1. 提言について

A. 奥野先生の提言から

(1) 平成5年からの教育課程完全移行にむけて、改訂の主な経過について（提言資料1～3により解説）

- ・それぞれの学校の中で美術科が必修教科としての位置を占めるためには、臨教審その他の文書に目を通し、他人任せではなく自分自身が認識を持つことが大切であること。
- ・教科性の確立のために、組織運営の大切さの認識が必要であり、子どもを「このように伸ばしていきたい」という教科の意識を持つこと。
- ・教育課程の改訂には、政治的動きも強いのだが、それぞれの学校の中で、教科の特性や意義を学習し、それを主張していかなければならない。
- ・全国的に見ると、主免許で美術科を担当している教師が少ないという実態がある。
- ・＜個性をいかす教育＞について今更というという気はするが、美術科としてこれを謳い、生徒像を作りあげる。

子どもと直接ぶつかって子どもを動かす美術科を常にめざしたい。

- ・必修教科として時数の確保をはかっていきたい。

(2) 美術科における基礎基本について（提言資料3～8により解説）

- ・遠藤教科調査官の紹介と解説
- ・基本と基礎とを今こそはっきりさせておくことが大切。
- ・基本は、どのような場合にも変わらないもの。
- ・基礎的事項は発達段階によって変化するものであり、新たに必要になるものである。
- ・人間の発達課題と美術教育とのかかわりについて。人間の発達段階と発達課題に美術教育がどのようにかかわっていくのかを私たちはよく学習する必要がある。中学1年は小学校からの延長上にあり、中学2年から高校1年までの発達段階と課題とのかかわり等を見通しておくことが大切。

(3) 個性を生かす教育と生涯学習について（提言資料9～10により解説）

- ・生涯教育・学習の考え方の経緯について、ユネスコにより提起されたものが中教審－臨教審－教課審等を経て、現在、教育界の最大課題となっている。
- ・創造活動が、教師から一方的に与えられた課題のみではなく、自らが意図に合う題材を設定し、その課題解決の方策を主体的に考え、計画し、実現に向けて実践するという形で行われる必要がある。

B. 武市先生からの提言

美術科における指導方法の改善をめざして、

(1) 教科の基本的な性格について

- ・美術科は、言われるまでもなく個性と創造性の開発と伸長が中心の教科であること。人間本来の表現欲求を満たす芸術は科学と同じ基盤に立つものである。（Peter、Michl 博士）を引用。

(2) 指導計画の在り方について

- ・指導計画A型（従来の学習過程）とB型（これからの学習過程）についての解説。子どもたちの学習活動の見直しが必要である。
- ・発想や構想の部分での時間の保障をはかること。その分、製作の時間へのしわよせが考えられるが、作品の大きさを工夫するなどの手立てが必要である。
- ・指導計画作成の観念として、複合教材の開発の工夫を。学年毎になりがちな指導計画を長い尺度で組む工夫を。

(3) 学習活動の指導について

- ・教師側の指導像の変革が必要であること。①教えること、②教師が留意することについての解説。

(4) 評価について

- ・評価のポイントとしての新しい観念の解説。
- ・作品に至るまでの過程の評価を大事にしていく。また、小題材と大題材の有機的組織の工夫の例。
- ・小学校から中学校への落差が大きい。特に札幌のような大都市において多く小中併置校などは差が小さい。これは美術嫌いの子どもができるもとになる。
- ・授業構造について高橋久美子先生（札幌市立琴似中）の実践紹介
- ・高橋久美子先生の感想

子どもの心の中、意識のよみとりを心がける。生徒の自己評価表の記述を通して子どもが何を学びたいかを把握。生徒のたくさんのエネルギーを吸いとっていくのは大変であるが、自分自身の欠点をとらえるものとして活用。

2. 質疑から

Q 発達段階をこなしてこない生徒がいるが、どのように対応すべきか。

A 個々の生徒の段階をおさえ、ひずみを見つけ、どこで、何を欠落したのかを見きわめ、ずっとさがったところから教えていかなければならない。





1

北海道造形教育研究大会 札幌大会 速報班

緑のシャワーでようこそ

大会長 佐々木 理温
(札幌市立三角山小学校 学校長)

おはようございます。

第41回全道造形教育研究大会札幌大会にようこそおいでくださいました。

会場には迷わずに来られましたでしょうか。「みすみやま」でも、「みかどやま」でもありません。真正正銘の「さんかくやま=三角山」のやわらかな緑のシャワーが、皆様のおいでをお待ちしておりました。

2年前にこの札幌大会、そして1年前には三角山小学校が主会場となることと決定されました。早速札幌大会運営実行委員会と研究部を中心に準備に入りましたが、この間、ご後援の道教委、市教委をはじめとする諸機関団体の皆様、教材等の提供でご援助いただいた協賛会員の皆様、そして特に札幌研の先生達や私の勤務校ではありますが会場校三角山小学校のPTAを含む皆様にはたいへんなご支援をいただけてきました。無事開会までごつづけられましたことに、厚くお礼申し上げます。

大会シンボルマーク



●中心デザイン

札幌・道庁中 六本木 地蔵

雪の結晶と雪平のイメージ

を、造形的バランスで

まとめました。

●活用デザイン

札幌・三角山小 智恵 美術

個性の個性を基に、創造活動の

豊かさを視野とした三角山の形で、

中心デザインを組み合わせました。

きて、いよいよ札幌大会の開幕です。

この2日間の研究大会が成功するか否かは、ご参加の皆様お一人お一人が何らかの課題を持ち主体的に大会にのぞめるかどうかにかかっているといえます。

「授業がかわる」「教師がかわる」ことが強く要望されている中で「かわる」とはどういうことなのかを具体的な子どもや教師の活動や姿から感じとっていただければ幸いです。

また、折角の機会ですので鑑賞の授業会場にもなりました札幌彫刻美術館(本郷新美術館)での彫刻鑑賞や、宮の森緑地での敷居も是非お楽しみください。短い時間で皆様の心を豊かなものにしていくことでありましょう。

最後になりましたが校舎の都合で設定が十分にとれないことや、こうした大会に不慣れで、皆様にご迷惑がかかるようなことがありましたらお許しを願います。

本年はまだ宮の森緑地での暮らしが聞かれますが、暑い陽射しのもと心が熱くなるような大会となることを期待申し上げます。

2日間どうぞよろしくお願いたします。



3

北海道造形教育研究大会 札幌大会 速報班

今授業がかわるI



生き生きとした顔
みんな造形大好きさ

三角山の春夏秋冬……(4年)(絵) 熊谷悦代先生

生き生きとした子ども達の歌声が澄みきった朝の空気をふるわせて授業が始まった。

「日頃は落着きしてはダメよ!」とされている窓ガラスであるが、今日の日は……!「いご描かん」パレットを手に子ども達は、やる気一杯!先生が「チャイムの合図で始まるからね」と静止しなければならぬ程。

大切なポイントをおさえて語りかける熊谷先生は魅力一杯!! ガラスの表と裏で、描きながら、バランスを見ながら少しずつ描き進めては余白との関係を確かめていく子ども達、和気あいあいの授業風景である。

- ・ローラーをつかってのせた線の具がきれい!
- ・スポンジの型おししている子がとても楽しそう!

立体に表す……彫刻美術館にて 鑑賞

●9:20—90のスケッチ、クイズのスタート

出合いを材料にと

白紙画用紙にかくされた

本物の作、テラコッタ「土と火の祭り」

菅原湯貴先生が、画用紙をさっと取ると

「オー……」と声あげ、

くいいるように見つめる目

身ぶり出す子どもたち……

●館内と自由にみまわる。

子どもの目せとらえた

鋭いことばが

スケッチブックに並ぶ。

●漁民の像の前で

朝早くから決に出かけて

たくさん魚をとってきた。

私の魚とカモメがとって

いかないかと、息とボカ

モメを見ている



●新考える人

ひらたひらたのロマン

うす藍色の手作り紙

の4マス7枚手に

三角山小5年1組

28名 天竺……●



●老人のブロンズ像の前で

こんなに年を取って

しまった。かわらけ

になてしまて、もう

仕事もできないう

になてしまった……

北海道造形教育研究大会 札幌大会 速報班

公開授業のようす
 〈中学校〉
 絵画分科会

自画像「もう一人の自分」
 美音保中学校 八重樫真一先生



八重樫先生の説明を
 しっかりと聞いている。先
 生の説明がわかりやす
 く、生徒はのびのびと

いよいよ制作だ。鏡を
 見る生徒の表情は真剣
 とその鏡の中に「もう一
 人の自分」を見つめようとしてい
 る。生徒の目がキラキラ
 光って、授業にも緊張感
 があっていた。

彫刻鑑賞分科会

「札幌彫刻美術館を訪ねて」(彫刻鑑賞)
 八軒中学校 中山 龍雄先生

夕陽10分、少し早めに到着。20分授業
 が始まり、フーラーがきて30分がた
 美術館に生徒37名、先生方30名が入
 っけあつた。全場の玄関前には、
 学校から持参した、顕像で「かほいさ、の智達」
 展示されていました。男子が1階、女子が2階
 にはなると、よく声が通る中山先生の説明を
 熱心に聞いています。最初は 不鮮新の作品の中で代表的な「氷雪の門」
 の鑑賞です。「何を求めているのかな」先生の問いかけに、「嬉しい、怒り
 など、作者の表現意図をよく、くみとった意見をのべている生徒が多か
 ったようです。これも事前学習がよく行われていたからだと思います。次に、鑑
 賞カードをもち、順番に自由鑑賞がはじまりました。この美術館は彫刻を
 ひがに飾られてもよいという珍しいところで、生徒達もあつちあつちと
 その力強さを感じとったようです。新島の作品には種々像もいろいろ、中
 には和装の着ている男子もいました。生徒達も熱心に、マナーよく
 フーラーの作品を鑑賞していました。

「笑の作品を」

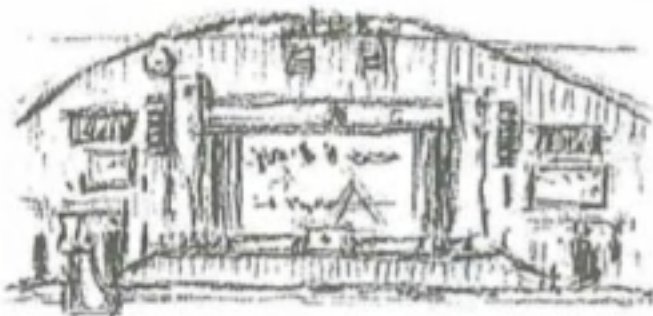
どうして笑ったか? 2階に位置する大空の木彫立前に生徒達が集まり、
 その彫刻について話し合いました。中山先生が「笑の作品」について一
 言、「この作品は何を笑っているところかな? 好き、好き、そんな動作をしてい
 るのか?」これに対し生徒達は、こう答えている。熱心な意見もあつた。こ
 ろ、先生が「笑の作品」について、「これは笑っているのか? 好き、好き、
 そんな動作をしていっているのか?」と、さらに、何を笑っているのかと
 いう問いかけに対して、その時代背景や、作者に対する「好き、好き」
 という言葉が返ってきた。フーラーの作品に対して、生徒も先生も互いに
 自由に話し合おうという熱気があつた。とてもいい場面でした。

北海道造形教育研究大会 札幌大会 速報班

◇小学生へのメッセージ

・伊藤尚先生の授業スケッチ(上野梗中・2年)

- ・授業開始前、心の解放トレーニング……伊藤先生
 は生徒に語りかけ生徒の緊張感をとりのぞくため
 が終始ここにて、リラックスムードである。
- ・授業の開始
 飾りつけの見どころを各班代表が説明(決意表明)
- ・太陽を題材にし、色の変化を重視したとの、円を
 スライドさせ色の変化と曲線を生かしたとのなど
 いろいろアイデアに工夫をこらしたとのが多い。



◇授業者からのコメント

- ・倉り出した作品で生活空間を飾るといふ試みは
 美術科の授業外では新しいことではありませんが、
 今回の、会場校に無償をいって思うままの授業を
 させていたでいて、2年1組30名共々感謝の気
 持ちでいっぱいです。
- ・ご参観いただいて本当にありがとうございました。
 …… ※上野梗中 伊藤 尚



〈厚画の一部〉

・「小学生に夢を与えるイメージになるのでは」
 と伊藤先生、最後のことは ……

※正面玄関い、はいいガラスをキャンバスにしたて
 た制作、のびのびと思いき、たデザイン、カラ
 ーチップの配色といいととても楽しい授業でした。

感動！ 興奮！ ユーモア！

中学校・短期・造形分科会

札幌市の研究の概略について角山先生（陸北中）から説明があった。この資料の膨大なこと、地区研究の実践の幅が広いことに驚く。

次いで中山先生（八軒中）公開授業の説明に入る。

何といっても短期美術部・館内に生徒を入れた授業である。興味関心は尽きないものがある。司会・助言者以下25人の先生方はかたずをのんで聞き入った。自分たちの中山先生。

授業説明の最後に自作ビデオの紹介があった。

何と彼はこの授業のためにビデオカメラを買って校内公開に行っていたのだ。そして生の笑い声、スイッチを消し忘れて、歩きながら写す風景のおかしさ。「赤雪の門」「笑」を前にしての説明の最後に笑さんの声が入っていた。子供たちは大いに喜んでくれた。

短期「笑」は何を表現しようとしたのか、話題は沸騰した。

中尾先生（日守中）の発言からは発達段階と造形要素（感情表現）

酒島先生（稲積中）の発言からは造形と表現活動の相関

助言者千葉先生（旭川六中）からは14ページの冊子、「美術科の選択（教科）」をプレゼントされた。

助言者東先生（新川中）からは短期・造形の本質と美術教師は美術教室から出よ！（学校環境づくり）と力強い応援。

分科会スケッチ

<公開授業>

・子どもがどうすればよいか。……制作している時の子どもの表情がよい。……これを授業にしようという教材に盛り入れる。……教材開発の着眼点

・問題点として
グループの移動の仕方と運動のこぼれが広がった。……英子エフガード

・初言者より
小塚と中塚との又読、両者の引き出しには異なる内容である。小塚が見たら喜ぶ題材であるが、材料受が薄いので、こぼれ方はないが、

<提言>

・中央、南地区より提言、その中でもより作品の発表がなされる。北地区の提言には札幌の芸術活動があったことを付け加えてほしい。

・問題点として
導入段階の大切さが認識され、教えこみによる生徒の主体性の欠如、失敗のないよう基礎基本をしっかりと教えるべきなどの意見が聞かれた。

新川中へのメモ……エフガード・伊藤先生に感謝して作品が完成した。



- | | | | |
|--------|--------|----------|--------|
| 小塚・小塚中 | 阿比 佳穂 | 滝川・滝川小 | 三坂 靖子 |
| 札幌・島嶼中 | 北本 春穂 | 東平・東平小 | 上杉 真智子 |
| 札幌・白旗中 | 佐藤 洋利 | 石狩・石狩小 | 加藤 雅子 |
| 旭川・旭山中 | 原 究 | ・・・南郷小 | 加藤 和明 |
| 日高・日高小 | 下村 佳佳 | 室蘭江・室蘭江中 | 鈴木 誠 |
| 札幌・花月小 | 川平 敬 | 江別・第一中 | 伊藤 十司 |
| ・・・ | 土田 美穂 | 千歳・千歳中 | 山内 真智子 |
| ・・・ | 坂本 美穂 | 江別・第一中 | 山崎 正樹 |
| 千歳・宮原小 | 藤本 隆子 | 石狩・石狩中 | 加田 弘 |
| ・・・木更小 | 村上 聡子 | 美瑛・美瑛中 | 山田 陽子 |
| ・・・日高小 | 坪根 早苗 | 日高・日高中 | 根 純明 |
| 門別・宮川小 | 山田 美智子 | ・・・ | 北 安樹 |
| 石狩・石狩小 | 柳本 陽子 | 北村・北村中 | 高倉 香子 |
| 札幌・南小 | 青山 清博 | 五島・五島中 | 江田 光子 |
| 札幌・東山小 | 山下 秋子 | 浦河・第一中 | 北 孝樹 |
| 千歳・千歳小 | 三好 深子 | ・・・ | 根 純明 |
| ・・・ | 藤原 史子 | | |
| ・・・ | 佐々木 早苗 | 滝川・滝川高 | 沖田 せせ |
| ・・・ | 阿部 了子 | | |
| ・・・ | 園見 智子 | | |

クイズ1. 本大会の参加者は何名でしょう。

みなさんから
いただいた原稿
は、皆さんの
でした。
ありがとうございました。



角山先生 校長
先生ありがとうございました

43人

新編 造形展

1991. 7. 28-29

北海道造形教育研究大会 札幌大会 速報組

1991. 7. 28-29

1991. 7. 28-29

速報組の発行を終えて

二日間の足で感じて感じるクリエイティブな造形大会もたくさん
の笑顔をあふれました。素晴らしい出会いや刺激があったので、
さやから感想がたくさんあふれられ予定以上に速報を発行する
ことができたことを感謝しています。ありがとうございました。

速報組 一岡

編集後記

「すごい」「さすが」の声を糧にしながら……

大会をむかえようとする私たちは、「生き生きとした授業をつくり出すための教師の役割」や「遊びと造形の接点や融合を求める研究」「新しい素材への挑戦」など、常に前向きな検討を行ってきました。これらの度重なる検討は、何より教師自身の造形教育に対する情熱のあらわれといえます。

ですから、札幌の造形教育を支え高めていくエネルギーは、「教師の情熱」といえます。札幌市内を眼下に望む三角山小学校の各授業会場では、教室からあふれ出る参会の先生方の温かいまなざしとつぶやきとともに、喜びに満ちた子どもたちの声が聞こえてきました。生き生きと活動する子どもたちと子どもの活動を一步下がって見守る教師と参会の先生方の情熱に支えられながら、札幌大会も無事終えることができました。この雰囲気は分科会記録集からも感じることができます。

私たちは、次への「すごい」「さすが」に向かって、すでに一步を踏み出したところです。

編集委員

小学校	富田 泰 (伏見小学校)
	阿部 宏行 (附属札幌小学校)
	菅原 清貴 (三角山小学校)
	篠原 寛 (新陵小学校)
	桜田 豊 (幌西小学校)
	大場 章子 (山鼻小学校)
幼稚園	森 美由紀 (ふくい幼稚園)
中学校	岡澤 邦彦 (屯田中央中学校)
	多田 紘一 (柏中学校)
高校	小林 智彦 (南高校)

1991年12月1日 発行

発行／第41回全道造形教育研究大会札幌大会

大会長 佐々木 理温

編集／札幌大会 研究部

印刷／(株)491アヴェン

〒001 札幌市北区北14条西1丁目

☎011-727-3231 FAX 011-727-3232

